原　口　館

原口館跡擬定地発掘調査報告書

1993・3

北海道松前町教育委員会

序

史書によれば、15世紀半ばの北海道渡島半島南部に、12ケ所の和人の館があったと伝えられております。いわゆる道南十二館であります。このうち、松前町内には4ケ所あり、その一つが原口館であります。爾来530年余、原口館は歴史の表舞台から忘れられた存在でありましたが、地元、原口地区の人々間に、その館の場所は今日まで伝えられていたのであります。地元有志の人々により「原口館を探る会」が結成され、歴史の片隅に埋もれた原口館に再び光を当て、あわせて地域の歴史を掘り起こそうと数々の活動を進めてまいりました。そうした地域の人々の熱意によって実施されたのが、この発掘調査であります。

調査の結果、神山台地の海岸に沿って延長約120m余に及ぶ空堀遺構が発見されました。しかも、空堀は新旧2時期に分かれ、新しい段階のものは大きく三つの郭に分かれておりました。これらの空堀は、当初の目的とした年代をはなれ、中世のものではなく、擦文時代のものであることが分かりました。

しかし、擦文時代で空堀を有する遺跡は新発見であります。これが何を意味するのか擦文文化、アイヌ文化史を解明するうえで貴重な発見であることは申すまでもありません。

ここに発掘調査の成果をまとめるにあたり、本書がより多くの人々に活用されることを期待するとともに、斯界の発展に些かでも寄与されることを願って止みません。

おわりに、この事業を実施するうえで、文化庁、北海道教育委員会をはじめ関係各機関多くの方々から多大のご指導、ご助言をいただいたことに深く感謝の意を表する次第であります。

平成5年3月

北海道松前町教育委員会

教育長　柳　田　由　孝

例　　言

1．本書は、道南十二館の一つである原口館の擬定地の調査報告書である。

2．本書の執筆は久保があたり、遺構図整理・トレースは赤松、遺物実測図・拓影は斉藤、川村、和田、河田があたった。

3．調査・整理にあたっては下記の機関、人々により指導・助言を賜わった。記して謝意を表する次第である。（順不同、敬称略）

文化庁記念物課、道教育文化課、青森県埋文センター、服部英雄、西田建彦、木村尚俊、大沼忠春、種市幸生、畑宏明、長沼孝、三浦圭介、大野憲司、菊池徹夫、豊田宏良、松崎水穂、森広樹、石本省三、藤田登、関尚彦、永田富智、西田茂、松本建速、松前町史に親しむ会、原口町内会、原口老人クラブ、原口小学校ＰＴＡ、原口館を探る会、高橋建設

4．調査によって出土した遺物、諸記録は松前町教育委員会が保管する。

目　　次

Ⅰ．調査に至る経過 …… 7
Ⅱ．遺跡の環境及び調査方法 …… 10
　1．遺跡の歴史的環境 …… 10
　2．遺跡の位置 …… 12
　3．調査要項 …… 15
　4．調査方法 …… 16
　5．基本層序 …… 17
Ⅲ．縄文時代の遺跡と遺物 …… 18
　1．縄文時代の遺構 …… 18
　2．縄文時代の遺物 …… 18
Ⅳ．擦文時代の遺構と遺物 …… 22
　1．擦文時代の遺構 …… 22
　　i　空　堀 …… 22
　　ii　住居址様の遺構 …… 33
　2．擦文時代の遺物 …… 35
Ⅴ．近世の遺構 …… 43
　1．溝状遺構 …… 43
　2．建物遺構 …… 43
Ⅵ．まとめ …… 47

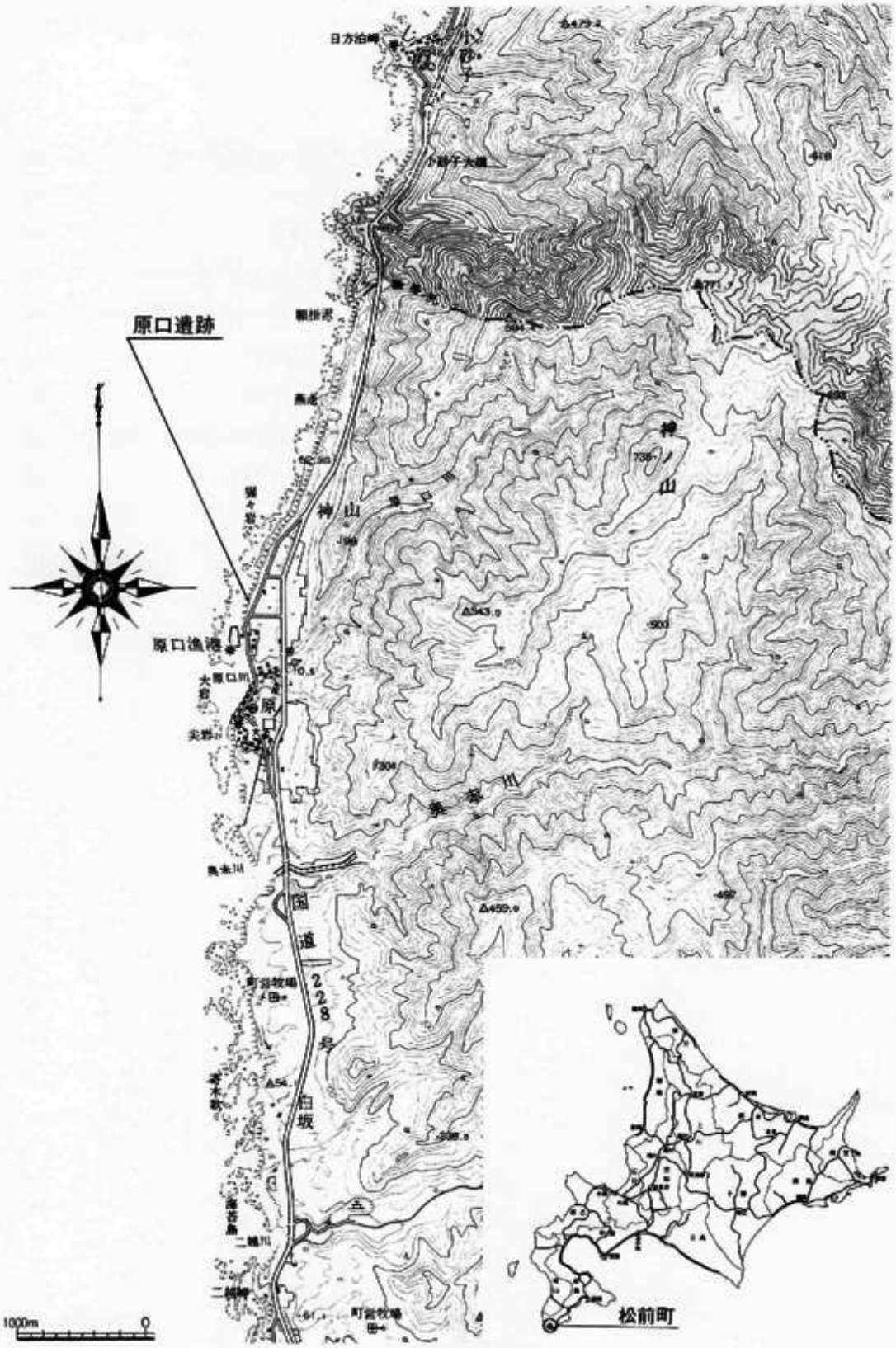
挿図目次

第1図　位　置　図 …… 6
第2図　遺構配置図 …… 13・14
第3図　土　層　図 …… 17
第4図　縄文式土器拓影 …… 19
第5図　石　　器 …… 21
第6図　空堀1実測図 …… 23
第7図　空堀2実測図(1) …… 24
第8図　空堀2実測図(2) …… 25
第9図　空堀3実測図(1) …… 27
第10図　空堀3実測図(2) …… 28
第11図　空堀4実測図(1) …… 30
第12図　空堀4実測図(2) …… 31
第13図　住居址様遺構 …… 34
第14図　擦文式土器(1) …… 36
第15図　擦文式土器(2) …… 38
第16図　擦文式土器(3) …… 39
第17図　擦文式土器(4) …… 40
第18図　擦文式土器(5)・須恵器 …… 41
第19図　擦文式土器 羽口・鉄製品・古銭 …42
第20図　溝状遺構 …… 44
第21図　建物遺構 …… 45

表－1　石器一覧表……22

写真図版目次

図版 1　平成 2 年度調査状況 …… 55
同、空堀調査状況 …… 55
図版 2　平成 4 年度調査開始前の状況 … 56
調査状況 …… 56
図版 3　調査区 1 …… 57
調査区 2 …… 57
図版 4　調査区 4 、 5 …… 58
調査区 6 …… 58
図版 5　調査区 7 …… 59
調査区 8 …… 59
図版 6　調査区10 …… 60
調査区12 …… 60
図版 7　住居址様遺構 …… 61
同、集石発見状況 …… 61
図版 8　擦文式土器出土状況 …… 62
Tピット …… 62
図版 9　溝状遺構 …… 63
調査終了全景（北から）……63
図版10　建物遺構 …… 64
同、カマド …… 64
図版11　縄文式土器 …… 65
図版12　石器・鉄製品・鉄滓・羽口 …… 66
図版13　擦文式土器(1) …… 67
図版14　擦文式土器(2) …… 68
図版15　擦文式土器(3) …… 69
図版16　擦文式土器(4) …… 70
図版17　擦文式土器(5)・須恵器 …… 71



第1図　位置図

Ⅰ．調査に至る経過

松前藩の正史『新羅之記録』及びその他の史料によれば、康正２年から翌長禄元（1457）年にかけての最初の民族抗争、コシャマインの蜂起の際に道南地方に12ケ所の館があったという。いわゆる道南十二館である。このうち松前町関係分では南から覃部館、大館、称部田館、原口館が存在したとされている。覃部館は町内の字東山の台地上のいずれかというが、この台地一帯は藩政時代の武家屋敷街として地割されていたため、今日その手がかりは何ら得られてはいないが、昭和52・53年度に及部川左岸の砂丘上から和人のものとみられる12基の土葬墓が発見されている。埋葬年代については必ずしも明らかではないが、副葬品に洪武通宝や永楽通宝が含まれるものの寛永通宝が入っていないこと、喫煙の風習を示すキセルが入らないことから15世紀中葉～17世初ごろと考えられ、あるいは覃部館を支えた人々の墓址である可能性も秘められている。

大館は上之国にあった蠣崎氏の２世光廣の大館移住（名を徳山館と改める）以来５世慶廣の福山館築城（1606年）までの190年間余、蝦夷地の政治・軍事的拠点であったのは周知のとおりである。現在、国指定史跡となっているが、整備は未着手となっている。

称保田館は町内字館浜の海岸段丘上に存在していたと伝えられ、大正13年に河野常吉によって著わされた『北海道史蹟名天然記念物調査報告書』にその概要と略図が示されている。しかし、昭和30年代の造田工事によってこの付近一帯は大きく改変され、その明確な所在地は不明となっている。なお、館が存在したとされる近くの海岸には、館主近藤四郎右衛門尉季常の名を冠したとみられる「近藤の岬」と呼ばれる地名が残っている。

原口館は『新羅之記録』では岡部六郎左衛門尉季澄が拠ったとされている。蠣崎氏がアイヌ民族との抗争に勝ち、戦国大名として成長していく過程の中で、他の館主層は滅亡、あるいは蠣崎氏の被官化していくが、岡部氏の場合は諸記録の中に見えていない。この事情について春日敏宏氏は、上之国守護職蠣崎氏の勢力下にあったが、何らかの理由によって早くから絶家したのではないかと推定している。（「松前藩成立期に関する一考察」『松前藩と松前』19号所収）それがために岡部氏の動向については原口館の名とともに『新羅之記録』に見えるのみで、以後全く不明になっているのである。原口館は歴史の表舞台からは全く忘れ去られた存在となったのである。

大正期の「函館支庁管内町村誌」（未刊本『松前藩と松前』23号所収）では「原口館阯現今原口村ノ畑地ニ化シ一見認メ難クナリシハ遺憾ナリ、今其附近ニ年経タル老松アリ、松頼昔ヲ語ルノミ、原口館主ハ鷹槌季直ナリ」と紹介されている（誤点筆者）。また、河野常吉の前掲書では原口館については「第一館址」と「第二館址」の２ケ所あって、「第一館址」は「西は断崖を以て海に臨み東六間を距って県道あり、県道に沿ひ土塁の形跡あり、其幅二間高三尺、内面の北部は幅五間深三尺、南部は幅三間深三尺の空塹の跡あり土塁及び空塹の総延長は各々四十間なり、塁内は南北二郭に分れ北部は南部よりも低きこと二尺とし南北二郭の間は其半約十間の土塁及び

空塹を以って画す。該所の南方約百間を距つる海岸断崖の中間に湧泉あり以て飲用に供すべし」と、かなり具体的に記述されている。「第二館址は「函館支庁管内町村誌」に云う原口館址のことらしく「踏査せすと雖も古老の談に拠れはカタコ山脈の山麓にして県道より高きこと約二十間の地にあり、西方より北方に幅約三間深さ三尺の塹跡を存す。其延長北に約六間西に約十五間とす。以て址址の面影を存す。其内部約十五間を隔て鬱々たる老令の松林あり…」という。この両書から読み取れることは、長禄元年以来450年以上も経た大正時代にあってもなお、地元原口地区の人々の間に伝承として脈々と原口館について語り継がれてきたことは驚異に価しよう。

昭和期に至り、太平洋戦争がますます激しくなったころ、松前町内でも各種の軍需物資を求めて探鉱が行われていた。昭和17年、マンガン鉱の探査が原口の集落に近い奥末川流域一帯で行われたが、この時、同川右岸地域（字原口、可香信正氏所有地）より塩カマスにして２杯分の古銭が発見されたといい、地元原口地区では運び込まれた古銭を実見した人々が多数存在している。この古銭のほとんどは探査にあたった関係者が持ち去ったというが、そのうちの一部が市立函館博物館へ寄贈されている。その内訳は開元通宝５、祥符通宝１、皇宋通宝２、治平通宝１、熙寧元宝３、元豊通宝８、元祐通宝５、永楽通宝８、不明銭16枚である。こうした古銭発見の事実は、原口館との関係が今一つ明確ではないが、函館志昔古銭を彷彿させるものであり、時代は遡るが『松風夷談』に見える戸井町で62貫余の古銭が発見されたことに相通ずるものである。奥末川発見の古銭の年代とその量から見ても、この地域に居住していた人々の経済活動の所産と考えて誤りはあるまい。

なお、最近聞いた話であり事実関係は確認していないが、戦後、奥末川の流域に造田した際に甕に一つ古銭が発見されたことがあったという。使用できるような銭（つまり穴孔き銭ばかり）ではないので捨ててしまったという。付記しておく。

参考までに先の「函館支庁管内町村誌」では原口村について次のように記載されているので紹介しておこう。

原　口　村

本村ハ元蝦夷語ニテ「あいえぬ」ト称シタリ。意不明ナレ共「あいぬの良き住家の地」ナリト伝フル人アリ。土人ノ部落ニシテ奥末川ニ沿ウテ棲息シ戸数ニ、三十戸アリシト云フ。今ヨリ約三百四十年程以前、羽後秋田地方海辺ノ人「関兵」ト云フ者来リ。奥末ニ住居シ蝦夷ヲ撫シ之レヲ督シテ漁事ニ勤メシトイフ。此頃尚他ニ二、三人ノ在住者アリ。漸次分家シ戸口増セシカ、寛保元年ノ大津浪ノ襲フ所トナリ幸シテ災厄ヲ免レタルモノ今ノ原ロニ住メルナリト

この伝承が正しいとするならば、原口地区では奥末川流域が最も古い集落であったということになる。しかし、『津軽一統志』では「原ロ――中略、家十四軒」奥末については「おこしつへ、家二軒」と記載されている。同書は周知のように寛文２（1669）年のシャクシャイン蜂起当時の様子を伝えるものであり、大津浪は1741年のことであるからこの矛盾をどう解すべきかは今後の課題である。

「原口館を探る会」（会長佐々木安雄原口郵便局長）が結成されたのは平成元年であった。会の設立趣旨は、伝承としては残っているが、埋もれたままになっている原口館に再び光をあてて先人の遺徳を顕彰するとともに併せて地域おこしを図ろうとするものである。当時の原口小学校長関尚彦氏（現、森中学校長）や佐々木会長を中心に賛同する人々が多く、何度かの勉強会、現地踏査が繰り返された。第一館址推定地には十数年前まで標柱が立てられていたので、不明となっている第二館址の手がかりを得るべく努力が重ねられたのである。

第二館址と目される一帯は昭和30年代に造田されて地形は一変し、しかも現在は打ち捨てられて荒蕪地となり、河野が現地を訪れた頃とは様相が大きく変わり、老松も既に朽ち果てていたのである。幾度かの踏査の後、ようやく枯れた松の根を発見することができ、筆者も平成２年春には現地を案内していただく機会を得た。現地を見た限りでは急斜面に造田したために土壌の移動が大きく、仮りに第二館址の推定地であったとしても旧地形があまりにも変えられ、そのため発掘調査を実施したとしても、遺構の遺存状況には大きな期待ができないと思われてた。むしろ比較的攪乱の少ないとみられる第一館址について試掘調査を進めてみることを提案したのである。調査は７月の上旬ころとし、それまでの間に更に勉強会を重ねることにした。６月、上ノ国町教委松崎氏のご好意によって、勝山館の発掘現場と出土遺物を見学させていただく機会を得た。参加者一同、中世の館とはどんなものか、どのような遺物が出土するのか理解が深まり、試掘調査に大いに期待がかけられたのである。

所定の手つづきを終えた後、調査は７月６・７日の両日とし、探る会のメンバーはもとより町内会、小学校ＰＴＡ、老人クラブのほか松前町史に親しむ会々員の参加もあり、村をあげての発掘調査であった。１日目は旧国道に沿って幅２ｍ、長さ100ｍのトレンチを設定したものの何らの手がかりは得られなかった。そこで第一トレンチより西（海）側に第二トレンチを設定し、翌日に期待をかけたのである。翌７日は、早朝から地元選出の佐々木町議員自ら小型バックホーを操り、作業の先頭に立っていただいた。僥倖だったのは第二トレンチが空堀の直上に設立されたことであった。日程の関係上一部分だけ調査したが、確認面での堀幅が約4.5ｍ、断面がＶ字形を呈し、地表からの深さが約2.5ｍあり、これが少なくとも海岸に平行して50ｍ以上も続いている堂々たるものであった。予想以上の成果に参加者一同大いに満足し、本調査の実施に大きな期待がかけられたのである。調査地点は、お盆期間中に帰郷者にも見学してもらう意味で暫くそのままとし、秋に埋めもどしを行なったが、その際、確認された空堀の箇所３ケ所に目印のため角杭を埋設しておいた。

３年度は諸般の事情で本調査をするに至らなかったが、この間、探る会ではカタコ山麓の調査や志苔館の見学を実施している。秋には字神山地内の畑の試掘調査を実施した。この成果については後述するが、調査の発端となったのは、地主が大根の収穫が終ってこれを埋けるための穴を掘ったところ、その中に本来あり得ない箸の玉石がいくつか出てきたので、これは変だということで探る会へ連絡が入ったことによるのである。この発見場所は聞けば旧国道ができる以前の松

前から上ノ国へ至る道路に近い位置であるという。調査の結果、石囲のカマドを有する掘立柱の建物跡であることが判った。出土遺物はなかったものの、柱間寸法から明らかに擦文時代以降の所産であり、旧道路との位置関係から原口集落と何らかの関係をもつものと推定された。

その後、12月の町定例議会では佐々木議員より一般質問があり、これに対し町側より調査に対する積極的な答弁があり、4年度の調査に向けて大きく期待が膨らんできたのである。

Ⅱ．遺跡の環境及び調査方法

1．遺跡の歴史的環境

原口地区は松前町の最北端の集落であり、小砂子（ちいさご）の峻とで檜山管内上ノ国町と接している。陸路伝いに檜山方面から松前へ向うと、比石館のある石崎を過ぎ、地形は次第に険しくなってくる。現在では快適な道路になったが、かつては沢筋を縫うような九十九折りの難所であった。やがて、千軒山魂が日本海へ崩れ落ちる裾に、檜山管内最南の小砂子の集落が営まれている。小砂子から顕掛沢を経て南下すると、眼下が急に広がってくる。

原口の地名の語源はよく分らないものの、いささかの推測を加えてみると、喘ぎながら嶮阻な山径を越えてきた時、眼下に平地が見えてくる。その平地は次第に広がりを増して松前まで続くのであるが、この平地の始まる地は正に野原の入口であったにちがいない。そういう意味において「原口」の名はアイヌ語に由来する地名の多い中で、珍しく日本語的である。『新羅之記録』や『津軽一統志』に見えるように、和人がこの地に入った頃から既に「原口」の名を冠していたと考えておきたい。

さて現在の原口集落は戸数214、人口660人（平成4年12月現在）であり、松前町の中心部から北へ約30kmの地にある。純漁村集落であるが、前浜の不漁から最近では通年出稼に出ている家庭も多い。集落の立地は、原口川によって海岸段丘が開折された僅な沖積平野と海岸に沿った地域に広がっている。前者は、かつては原口川が暴れ川であったため居住環境としては良好と言えず、大雨の度に高台へ避難することもしばしばであったという。最近の市街地前浜は護岸が施され、大きなテトラポットが積み上げられているが、かつては広い砂浜であった。戦後、原口港が竣工し防波堤が伸びるに及んで潮流が変わり、そのために砂が削られ浜が消滅してしまったのである。かつてはこの砂浜が生産の場であり、小学校の運動会すら開催されていたという。こうした条件の下で、集落は海に面した区域から始まり、やがて原口川筋へ伸び、その後小学校のある台地と、原口川北側の字神山の台地へと広がり、次第に発達してきたのである。

少し原口の歴史を振り返ってみることにしたい。前述のように近世前期の様子は不明の点が多いが、幕府直轄時代の文化6（1809）年ころの様子を『村鑑下組帳』によって概観してみたい。

一、原口村

松前ゟ六里三拾丁

名主　藤左衛門

年寄　関兵衛

家数　拾弐軒

人数　四拾三人　　内　男　弐拾四人

女　十九人

制札　弐枚　邪宗門　捨馬

船数　図合　　弐艘

磯舟　　拾壱艘

牛馬　馬　　拾九疋

牛　　無之

村境　おこすり川ゟ鍵掛沢迄凡壱里半程

海辺　浜通岩崎多　通路相不成　おこすりを通　坂を下りおみや川を渡り又上り平地通り村方下り　村際浜辺小々通り　つはくるわしり　立石何れも岩崎通路相不成　こまいまいの野に上り　みのうたの沢　おんこの木の沢　鍵掛沢　何れも山之上を通り　右沢々江下り　又上り坂之屈曲ニ而　往還甚難場所

山林　おくしいの川水上、家掛越之山　樹木少々有之　村方ニ而炭焼場有之原口の沢　みのうたの沢　おんこの木沢　鍵掛沢

右何れも左右峻嵯ニ而沢近ニ付樹木不足

畑地　屋敷廻江菜大根等少々作る

漁場　歩銭　弐百四十文

雪簾　六枚

稼業　男は春鯡取雇　自分仕入之船差出候者ハ無之　乗合等仕候者有之、夏は細布取　そい釣　秋は鰯少々有之　焚用薪取　又ハ日雇取　駄賃取

女は春海苔摘　無切有之　定式ニは不相成　古来粟　稗仕付候得共　十ケ年以来虫付難出来　近年食料大根斗蒔付　秋は小柴取其外洗張

産物　海苔　干鰯　薪　炭

寺社　八幡宮　年歴不相知　神主江良町村佐々木上総持

古百姓　代歴不知　草分百姓　関兵衛

是は七十年前大津浪之節　他行ニ而相残相続

旧跡　無之

（『松前藩と松前』25号所収）

この稼業の項目でも分かるように生活振りは貧しく、男は前浜のニシン漁が終ると奥場所のニ

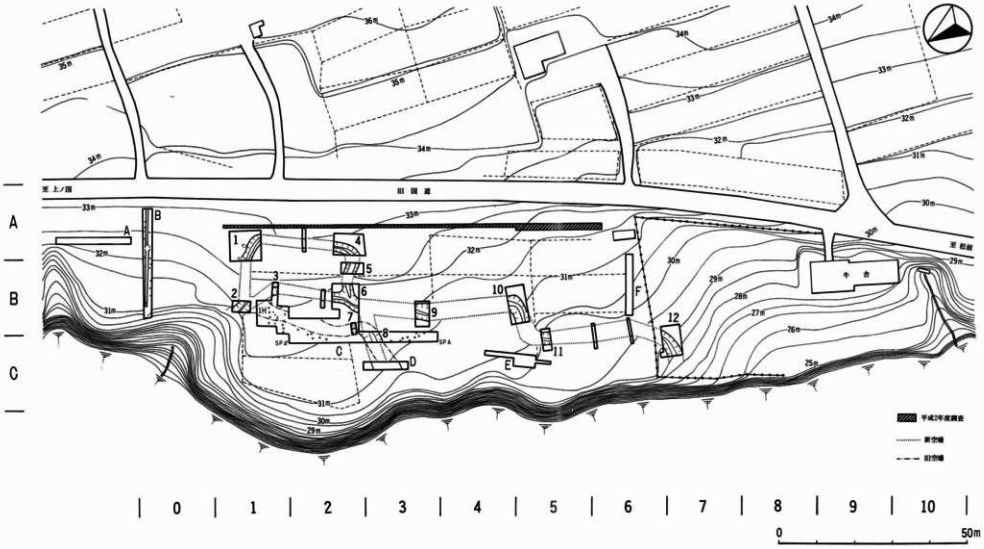
シン場の雇いに、夏に帰郷して磯廻りの漁に、福山城下へ出て日雇や賃取、女は冬から早春にかけての海苔摘み、雪が消えると屋敷廻りでの畑仕事にいそしんで留守を守り、洗張の仕事をすることもあったようである。こうした実態は西・東在の村々でも凡そ同じであり、基本的には明治に至るまで大きな変化はなかった。

原口の人口は明治初年で164人、同20年には257人、大正元年には535人と増加してきている。こうした推移の背景には自然増のほかに、移住者の定着という要因も見逃せない。原口村に限らず、明治維新以降藩体制の束縛から解放され、また北海道開拓という政策もあって移住者の増加、村々の発展という過程を経てきている。この点は、松前藩の崩壊によって家臣団の離散、有力商人層の離町、ニシンの漫性的な凶漁によって明治初年には17,700人余を数えた福山市街の人口が、大正元年には6,100人余に激減したのとは好対照である。(なお、同12年には4,100人余にまで減少している)

移住者の定着という点では西在の根部田村（現字館浜）から原口にかけては一つの特色が見られる。それは、ニシンは相変わらず凶漁が続いたものの、日露戦争以降これらの地域がスルメの一大産地として成長していくことにあった。このあたりの経緯については『松前町史通説編第2巻』に触れてあるが、川崎船による無動力船の時代、これらの地域に本州方面からの入稼漁業者が大挙してやって来たのである。実数は不明な部分が多いが、例えば大正3年（「函館新聞」大正3年10月21日付記事）には、松前郡沿岸（松前～福島町）では地元漁船404艘、漁夫4,744人に対し、入稼漁船592艘、漁夫5,118人であったという。この前年の原口には加賀、越後、岩内からの入稼漁業者44名の名が見えている。「原口村川崎船組合会員名役員名簿」）イカ釣漁には漁業（経営）者数の7・8倍の漁夫が乗り子として必要であるから、大正2年の原口には352～396名の人々が漁期である7月中旬から10月下旬までの間やって来たことになる。これら漁業者は納屋を借りた者6名、借家4名、浜小屋1名、個人住宅や間借りをした者が33名であったという。こうした様相は戦争が激しくなる昭和13・4年ころまで続き、前記地方の人々のほかに津軽、秋田、庄内、寿都方面の入稼者もやって来たのである。現住人口に匹敵するような入稼者の急増によって各村々は活況を呈し、入稼漁夫の中にはこれが縁で定着する人が少なからずあったのである。こうした背景の下で、次第に村々の体裁が整えられていったところに大きな特色が認められるのである。

2．遺跡の位置

調査地点は、原口の集落から旧国道を北へ約700m向った字神山の台地上にある。旧国道は海岸に沿って台地上を進み、西側は急峻な崖地となり、東側は緩やかな傾斜でカタコ山に至っている。台地の幅はこのあたりではまだ狭く、最も広い場所でも東西に300m程度であり、北へ向うにしたがって消滅していく。一般に松前町では何段かの発達した海岸段丘を見ることができるが、原口川右岸の神山の台地ではまだこれを見ることはできない。神山台地は昭和30年代の造田事業のため旧地形は完全に窺い知れないが、小さないくつかの沢によって開析されている。現在これ



第2図　遺構配置図

らの小沢が伏流水となって何ケ所か崖際で湧水している。今回の調査地域でも牛舎の南側を含めて3ケ所の湧水地点を確認している。これらは真夏でも涸渇することはなく、遺跡の形成に重要な役割を果たしている。神山の台地では牛舎南側の湧水が最も水量豊富なようで、今回の調査地点から神山の集落にかけてやや大きな遺跡を形成するようであり、縄文時代早期や擦文時代の遺物が採集できる。しかし、遺跡の後背面積が狭いためか縄文期の大規模な遺跡は原口川の左岸段丘上に形成され、原口小学校の校庭にかけては中期から後期に至る大規模な遺跡が形成されている。

調査地点に立つと眼前に大島・小島・奥尻島が、更に晴天時には遥か大成町の太田岬を望むことができる。調査地点は地図上ではそう大きな岬とはなっていないものの、通称鱗潤の岬と呼ばれている。現在でも太田方面から南下する船は、進路の目安を鱗潤の岬に取るという。つまり、松前半島部の最西端がこの鱗潤の岬であり、航海上の重要な位置を占めているのである。精密機器の発達した現代の漁船でもこうした手法を取っており、帆走時代には尚更航海上の重要地点だったのである。

また、原口地区は東風（やませ）の際には絶好の帆待ちの場所であった。例年、6～7月下旬にかけてオホーツク海高気圧が発達すると東風が卓越し、海が荒れて漁船の操業に大きな支障が出るほどである。東風が吹き出すと松前町でもほぼ全域でこうした状況となるものの、台地の幅の狭い原口地区では沢筋からの吹出しが弱く、千軒山魂が屏風となってまるで別世界の観を呈するのである。加えて、前述した原口の前浜は汀から急に深くなっており、舳先を砂浜に乗り上げてもスクリューや舵が海底に当たることがない程だったという。天候の変化によって東風が吹き出した場合には、原口の湊はこのように絶好の避難場所だったのである。

道南十二館の立地条件を考えた場合、比較的大きな川口付近に形成される場合が多く、鮭漁と湊としての立地条件から解釈されるのが通例であろう。そういう意味においては、原口館の場合には奥末川を考慮しても鮭漁の占める比重は大きなものではない。また、昆布にあっても同様である。前述のように、海上交通上の要衝という意味において、重要な位置を占めていたと考えるべきではあるまいか。

3．調査要領

発掘調査要項、調査体制は下記のとおりである。

1）調査目的　道南十二館の一つである原口館の規模、構造の解明

2）調査期間　(1)発掘調査　平成4年6月4日～同年7月18日

　　(2)遺物整理　平成4年11月20日～平成5年3月31日

3）遺跡名　原口館

4）調査予定面積　1,000㎡

5）調査予算　6,000,000円

6）調査主体者　松前町教育委員会教育長　柳田　由孝

7）調査事務局　松前町教育委員会文化財課

8）調査担当者　松前町教育委員会文化財課　久保　泰

9）発掘作業員　宝福兵一、斉藤不二夫、赤松順子、川村節子、河田敬子、和田映子、斉藤雅子、三浦文子、斉藤春美、可香末子、藤谷郁子、可香ユミ、斉藤信子、斉藤美和子、斉藤末子、斉藤百合、可香礼子

10）整理作業員　赤松順子、川村節子、河田敬子、和田映子、斉藤雅子、三浦文子、惣蔵則子、松川笑美、林文子

4．調査方法

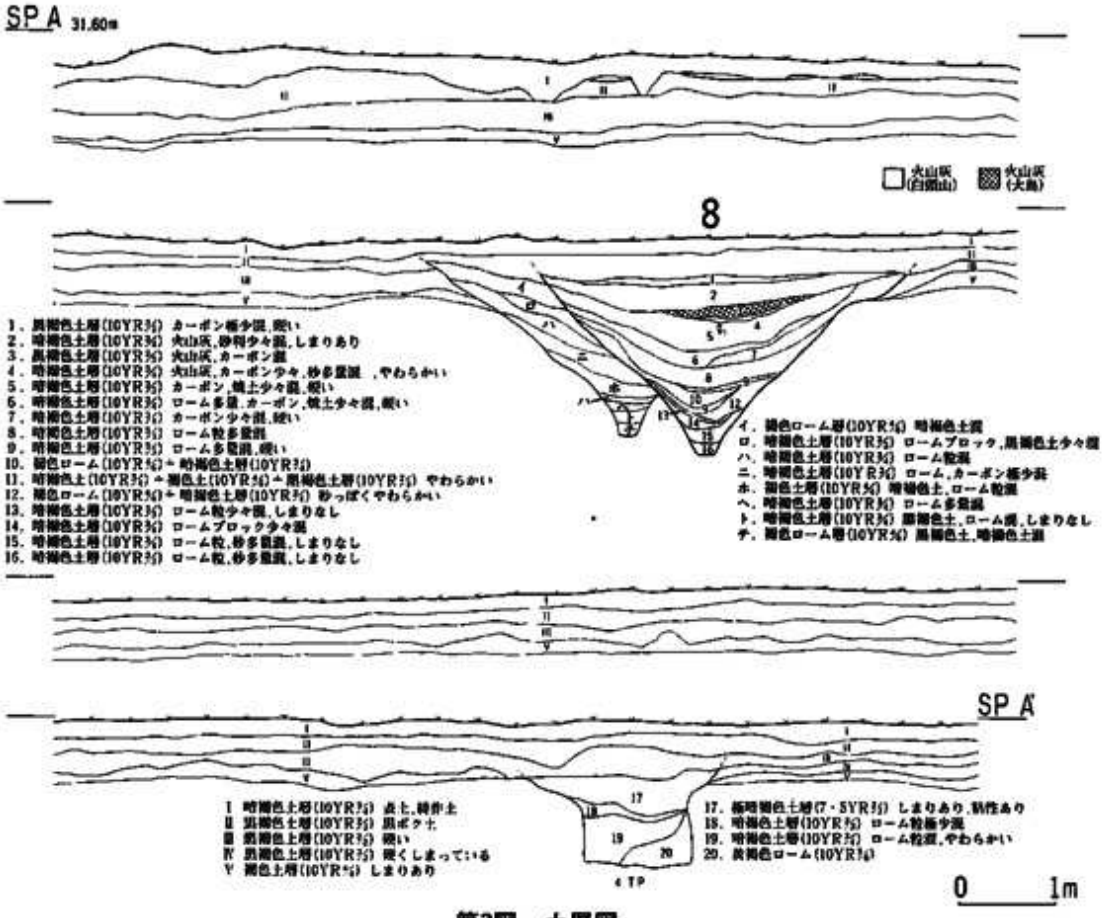
前述のように空堀の一部を平成２年度に確認しており、本年度の主眼はこの空堀がどのような広がりをもっているかを把握することとした。調査期間、予算的な余裕が生じた場合には、郭内部の構造も把握するものとした。当初、空堀の広がりが旧国道の東側にまで及ぶのではと考え、予め各土地所有者の承諾を得ておいたが、結果的にはこの区域は未調査である。調査にあたって、季節柄イタドリ他の雑草が生い茂り、草刈作業には「原口館を探る会」会員の方々の尽力があった。

草刈終了後、調査予定地内の任意の点を選定し、これを基点として20ｍ間隔に、西側にＡ．Ｂ．Ｃ．とやはり20ｍ間隔に各々プラスチック杭を打った。したがって調査区名称は、北から南へＡ－１、Ａ－２…、東から西へＡ－１、Ｂ－１ということになる。レベルは、字原口清水商店前に一等水準点があり、これを基準点として利用した。

杭打ち、ＢＭ設定後、一昨年度埋設しておいた最も南側の杭周辺－調査地点10－から着手した。調査の結果、同地点では外堀が大きく西側に折れていることが分かり、単純に地形に即したあり方をしているのではないと考えられた。その後、調査地点６（一昨年度認確しておいた北側の杭部分）付近を調査するに及んで、旧国道に平行する空堀と、更にこれと分れて東側へ伸びるやや小規模な２種類の空堀があることが分かった。以上の点から当初人力のみで調査を進める計画であったが、より広範囲に調査区を設定し、適確に空堀のあり方を把握すべく小型バックホーを導入した。小型重機では空堀が続いていると思われる区域について幅約0.5ｍ、長さ約５ｍ程度を開削し、必要に応じて拡幅していった。その結果第２図に示したように空堀については12ケ所調査し、凡その規模を確認することができた。

このほか任意のトレンチＡ～Ｆを設定し、人力によって空堀の有無を確認した。Ａトレンチでは遺構、遺物とも全く見られず、Ｂトレンチから溝状の遺構が発見された。後述するようにＣトレンチでは新旧２時期の空堀があることが分かり、Ｆトレンチは縄文時代早期の良好な包含層であった。

各調査地点空堀は20分の１平面図、同土層図、写真撮影とし、そのほか必要に応じて10分の１実測図を作図した。炭化物を含む土壌は可能な限り採取し、フローティションを実施した。また、



第3図　土層図

調査と並行して500分の１地形図を作図した。

調査終了後は、プラスチック杭については今後も調査が予想されるため抜き取らずそのままとしておいた。また、既調査区には11ｔダンプ１台分の砂を入れ埋めもどしを行なった。埋めもどし終了後、「原口館を探る会」の協力によって白ペンキ塗の杭を立て、空堀の位置が分かるよう示しておいた。

5．基本層序

調査地の一部は造田事業により大きく土壌が動かされ、また海岸に近いこともあって風蝕による堆積の貧困な部分が多くあった。したがって極端な箇所では地表から基盤層まで30cmに達しない部分もあった。第２図に示したようにＣトレンチについて土層図を作図したが、概ね本遺跡の基本層序は下記のとおりと考えてよい。

第Ⅰ層　表土層。耕作土層。10～30cm以上の層厚があり一定していない。

第Ⅱ層　黒ボク層

第Ⅲ層　黄白色火山灰層（苫小牧－白頭山火山灰層）基本層の堆積が良好でしかも攪乱の極めて少ない部分にのみ存在する。空堀との関係では、本層は明らかに空堀より古い。

第Ⅳ層　黒ボク層。第Ⅲ層の見られる部分で分層可能。

第Ⅴ層　ローム漸移層。Ｅトレンチで観察されたように縄文時代早期の遺物包含層。

Ⅲ．縄文時代の遺構と遺物

1．縄文時代の遺構

縄文時代の遺構として認められるものにはＴピットが４ケ所発見されている。調査区１から３ケ所、Ｃトレンチから１ケ所である。各々のＴピットについては説明を省略しておきたいが、１・２号Ｔピットは空堀３と重複するもの、３号Ｔピットは同空堀の構築によってほぼ破壊され、僅かに空堀の底にＴピットの痕跡の見えるものである。これらのＴピットは、明らかに空堀に先行するものである。４号Ｔピットは土層セクションに掛かったもので、全容は出していない。

小面積の調査のため断定できないが、Ｔピットは湧水地点に近い１・２区あたりに集中する傾向が読み取れる。だが、時期については特に構築年代を決定づける遺物が出土しておらず不明としておきたい。

2．縄文時代の遺物

1．土　器（第４図）

早期の貝殻文系のものから晩期に至るまで総点数755点出土している。なかでもトレンチＦからの出土が最も多く、ほとんど東釧路Ⅳ式に属するタイプであった。この時期の住居址等の遺構は一切発見されていないが、トレンチ内での遺物出土状況、周辺の耕作地での表採などから、牛舎の南側にある湧水地点を中心にこの時期の集落が形成されているのであろう。

また、Ｏ区の湧水地点周辺からも少量ながら各時期にわたる土器片が出土している。本遺跡では10区の湧水地点を中心に東釧路Ⅳ式期の集落が、Ｏ区の湧水の周辺にキャンプサイト的な生活の痕跡が存在すると考えてよいであろう。

以下、出土土器を次のように分け、簡単に説明しておきたい。

第Ⅰ群土器　貝殻文を特色とするもの

　ａ類　貝殻条痕文を特色とするもの

　ｂ類　ムシリⅠ式に類似するもの

第Ⅱ群土器　東釧路Ⅳ式に含まれるもの

第Ⅲ群土器　後期に属するもの

第Ⅳ群土器　晩期に属するもの

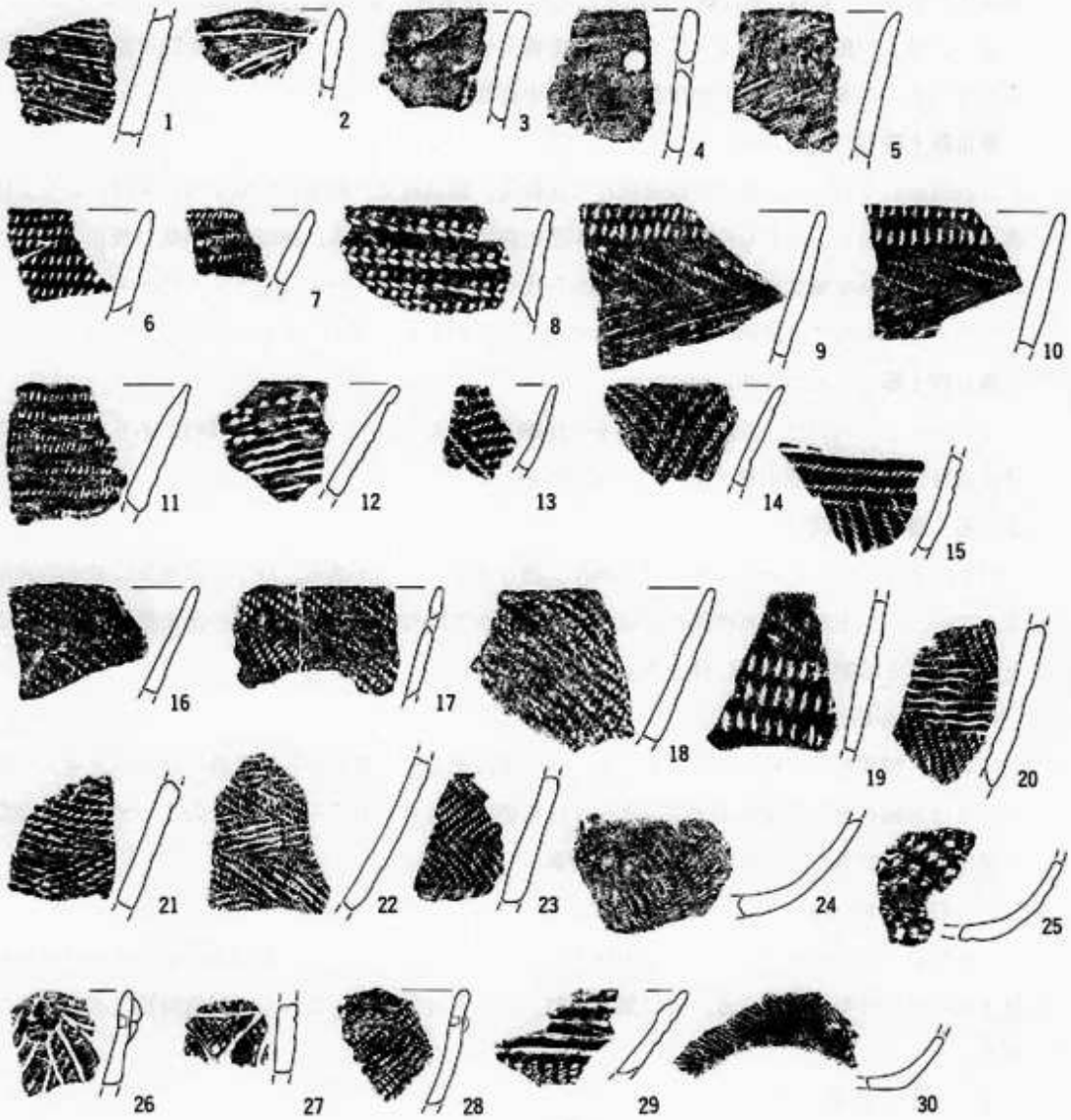
第Ⅰ群土器

a類（第4図1）

1点だけの出土である。やや厚手で胴下半部の資料である。横位の貝殻条痕文のみ付している。松前町内では、この種のものは白坂8地点で大淵式に類似する平底となるものと高野Ⅱ遺跡で例のある尖底となるものである。本例は、いずれかのタイプであろう。

b類（同2～5）

ムシリⅠ式に類似するものを本類としておく。2は口縁が小波状となり、沈線によって文様帯を構成するものである。3・4は無文となるもの。5は浅い斜位の条痕文の付されたものである。本類は白坂8地点出土資料に類似するものである。



第4図　縄文式土器拓影

第Ⅱ群土器（同図6～25）

前述のように主としてトレンチFから集中して出土しているが、各調査区からも若干出土し、総点数700点余を数える。口縁部が平縁もしくは小波状となり、丸底に近い尖底となる器形で、東釧路Ⅳ式のグループとして理解されているものである。全道的に広く分布し、本遺跡の近くでは白坂2、7～9地点で完形資料を含め、いくつか出土している。

本例も施文手法等でそれらと基本的な違いは認められないようである。図示した資料を施文手法によって分けると、絡条体圧痕文をもつもの（6．7．9～11．19）、縄の側面圧痕により文様を構成するもの（9．10．12～15．20～22など）、刺突文によるもの（12）、縄文を付するもの（16～18．20.23）、縄を用いているとみられるが施文手法の不明のもの（8）などがある。縄の側面圧痕のタイプには、単に縄を押圧するものと、絡条体によるらしいものとがあるようである。

なお、単一の施文手法によってのみ器面を飾るものは少なく、いくつかの手法を組み合わせて施文するものが多い。こうした手法は他の例と同様である。

第Ⅲ群土器（同図26～28）

3点図示しておいた。26は口縁部破片で沈線文、磨消縄文、貼瘤、内側からの突瘤により文様帯を構成するらしい。27も沈線文、磨消手法の窺えるものである。28は口縁が低い波状を呈し、体部は縄文のみを施文するらしい。内側から浅い刺突が加えられる突瘤手法が見える。

今のところ町内では類例の少ないものであり、後期後葉に属するものである。

第Ⅳ群土器（同図29．30）

2点図示しておいた。29は口縁に4条の沈線文の見えるもの。30は底部資料である。いずれも焼成良好であり、晩期中葉あたりに含まれるものであろう。

2．石　器（第5図）

21点図示はしておいたが、このほか剥片、礫などがいくつかある。以下、器種毎に若干の説明をしていくが、土器との共伴関係は必ずしも明らかではない。だが、土器の出土量を参考にすると、ほとんどは第Ⅱ群土器に伴なうものとみられる。

1．石鏃（1～5）

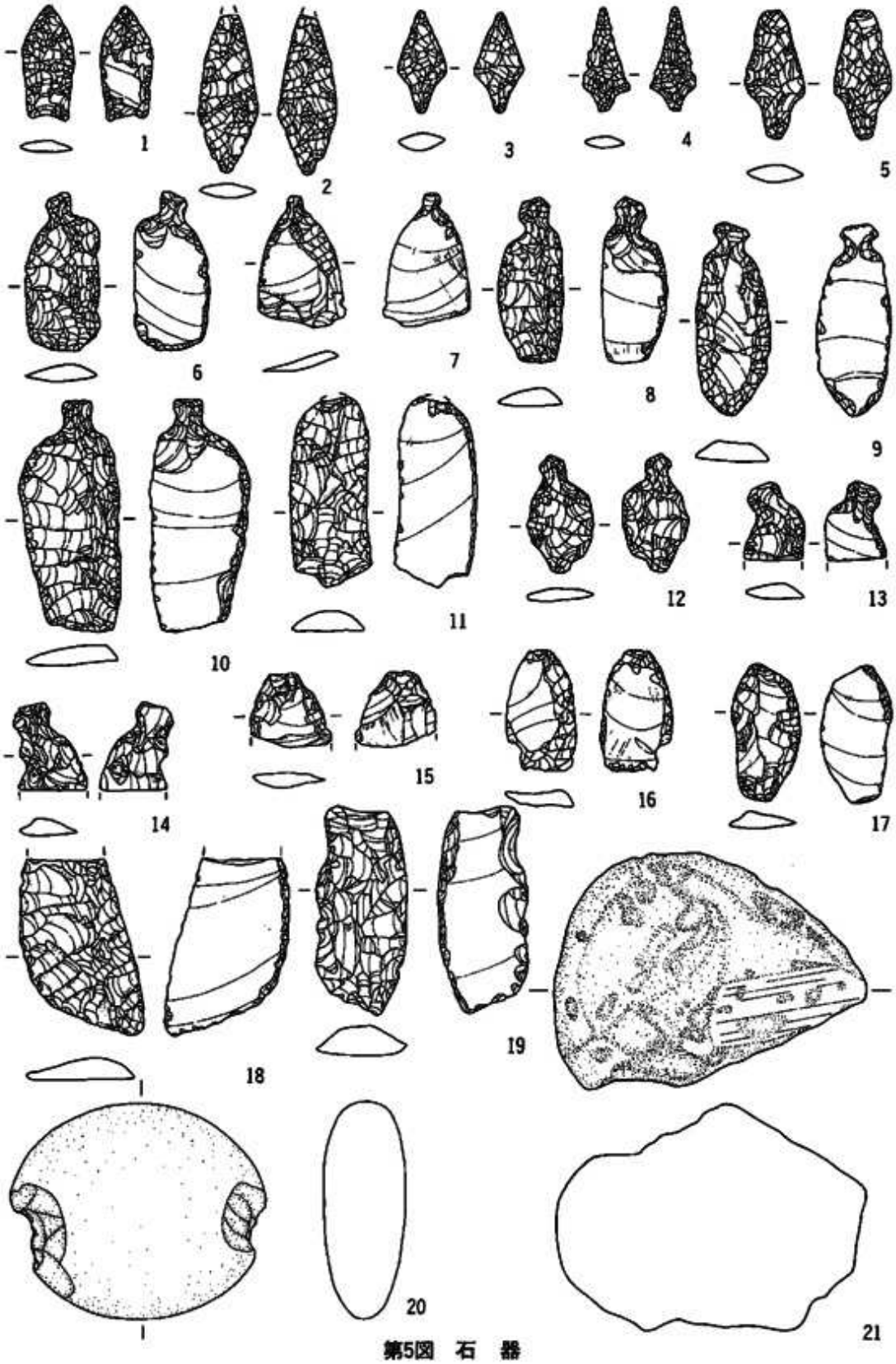
五角形、柳葉形、有柄のものがあった。1・2は出土区、層位から第Ⅱ群に伴なうと考えてよい。2は黒曜石製、先端部を欠く。3～5は有柄鏃であり、おそらく中期以降のいずれかの時期に属するものであろう。いずれも硬質頁岩製。

2．石匙（6～14）

欠損資料を含めて9点あった。空堀埋土内からの出土もあったが、形態から見て6～11は第Ⅱ群土器に伴なうものであろう。12は黒曜石製。13．14は欠損品。これらの帰属時期は不明としておく。

3．スクレイパー（15～19）

5点図示しておいた。不定形の剥片を用いて刃部を作出しているものである。いずれも片面加



第5図　石　器

工である。15.16は出土区から第Ⅱ群土器に伴なうものであろう。

4.石錘(20)

1点のみ出土。扁平な円礫の両端を打ち欠くものである。第Ⅰ群土器に伴なうものであろう。

5.軽石(21)

黒色を呈する軽石で、若干の擦面がある。空堀5の埋土中からの出土であり、擦文期に伴なうものかもしれない。

表－1　石器一覧表

No.	出土位置	層位	器種	長・幅・厚(cm)	重量(g)	石質	備考
1	B－6	Ⅰ	石鏃	3.61 ×1.58×0.38	2	頁岩	
2	B－6		石鏃	(4.96)×1.80×0.43	(3.1)	黒曜石	先端欠損
3	B－6	Ⅰ	石鏃	3.20 ×1.50×0.55	1.5	頁岩	
4	A－1空堀		石鏃	3.25 ×1.42×0.35	0.9	頁岩	
5	B－6		石鏃	4.08 ×1.75×0.52	3.7	頁岩	
6	C－7		石匙	5.0 ×2.30×0.55	7.4	頁岩	
7	C－7		石匙	4.26 ×2.50×0.30	4.0	頁岩	
8	A－2		石匙	5.21 ×2.0 ×0.50	6.3	頁岩	
9	B－2空堀		石匙	6.0 ×2.28×0.59	9.9	頁岩	
10	C－7		石匙	7.22×2.92×0.95	18.5	頁岩	
11	B－6		石匙	(6.02)×2.40×0.59	(11.3)	頁岩	つまみ欠損
12	B－6	Ⅰ	石匙	3.68 ×1.98×0.40	2.8	黒曜石	
13	位置不明		石匙	(2.42)×1.79×0.49	(2.7)	頁岩	欠損
14	B－6		石匙	(2.71)×2.10×0.52	(2.6)	頁岩	欠損
15	B－0	表土	スクレイパー	(2.39)×2.29×0.55	(3.3)	頁岩	欠損
16	B－6－10		スクレイパー	3.79 ×2.55×0.43	5.1	頁岩	
17	B·C－2	表土	スクレイパー	4.19 ×2.02×0.50	4.3	頁岩	
18	空堀		スクレイパー	(5.60)×3.25×0.60	(15.1)	頁岩	
19	B·C－2	表土	スクレイパー	6.45 ×2.23×0.9	16.1	頁岩	
20	B－1		石錘	8.0 ×6.80×2.5	200	石英安山岩	
21	B－1－AMs5の空堀		軽石	9.70 ×7.3 ×7.1	102.3	軽石	

Ⅳ.擦文時代の遺構と遺物

1.擦文時代の遺構

擦文時代の遺構は、まとめの項に述べているような理由によって空堀と住居址様の遺構とがある。以下、その概要を記しておく。

1.空　堀

空堀には明らかに新旧2時期のものがあった。第2図に示した調査の位置にしたがえば、調査区2から7・8を経てトレンチDに至るものが旧空堀、空堀1として記載していく。新空堀は、その規模、延長の状況によって次のように分離が可能である。即ち、調査区2から3・6を経て8及びトレンチDで空堀1と重複するもの。これを空堀2としておく。これらの山側(東側)にあって、調査区2から1・4～6を経て空堀2と繋がっていくもの。これを空堀3とする。また、調査区

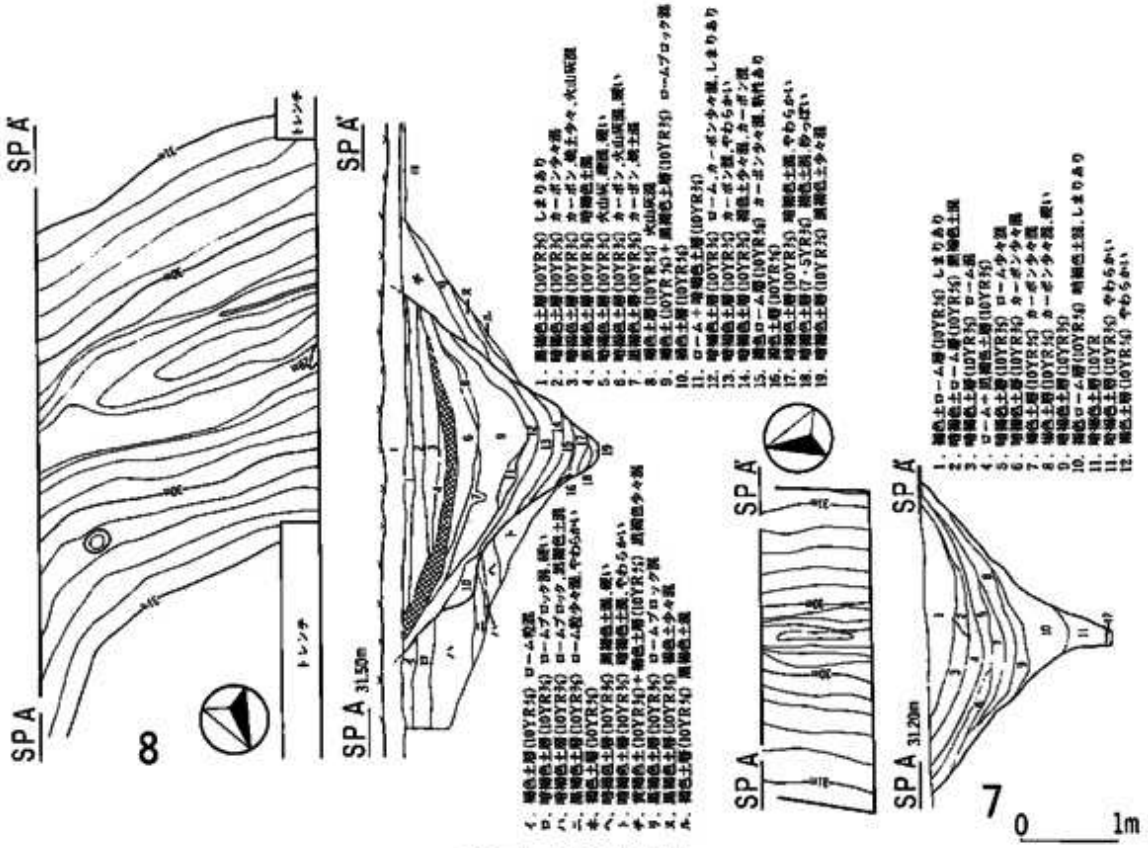
6を経て9～12に至るものを空堀4としておく。

以下、空堀毎に説明していくものとする。

1)空堀1(第6図)

調査区2から7・8を経てトレンチDへ至ると推定される。空堀1によって囲繞される平坦面(郭)の広がりは、約40×20m程度の範囲であろう。調査区7と8において堀底まで明らかにしてみたが、第6図に示したように調査区8では空堀1と2の重複関係がよく分かる。トレンチDを設定してみたが、やはりここでも重複していると推定された。おそらく、重複したまま崖に至るものとみられる。調査区2では詳しくは後述することにしたいが、明確に空堀1が重なっている形跡は見えない。おそらく、同調査区のより西側か南側あたりに空堀1が延びていると思われる。

空堀1を確認した発端は、トレンチCを設定した際、幅3～4m程の帯状のロームの広がりが認められたことによる。トレンチを拡幅して、上述のような空堀1の延びが推定されたのである。そこで調査区7を設定してみたが、土層図に示したように、この空堀内には多量のロームが投棄されたことが分かった。つまり、一時的なロームの投げ込みによって、空堀1が埋め込まれたと推定されるのである。調査区8でも、そうした事実が読み取れそうである。おそらく、空堀1が存続していたある時期に、何らかの理由によって別の空堀を造る必要が生じ、この時の排土によって空堀1を



第6図　空堀1実測図

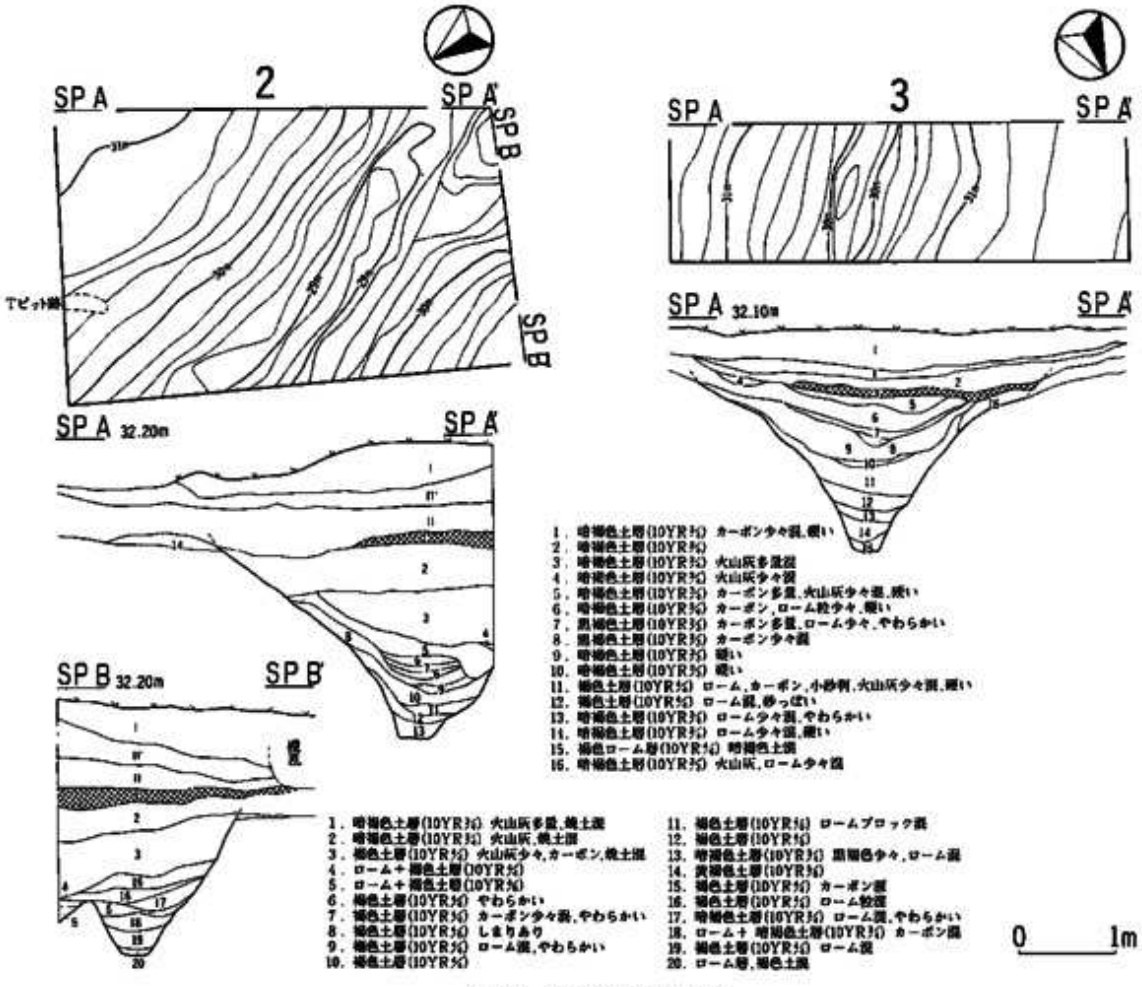
埋め込んで平坦面(郭)を造成したものと推察しておきたい。

空堀内からは若干の縄文式土器、擦文式土器片が出土しており、空堀1の構築時期は擦文時代か、これ以降の所産とみることができる。空堀1の確認面の両側について、特に念入りに精査してみたものの、これに伴なう杭列のようなものは確認されていない。また、土塁跡のような痕跡も認められない。

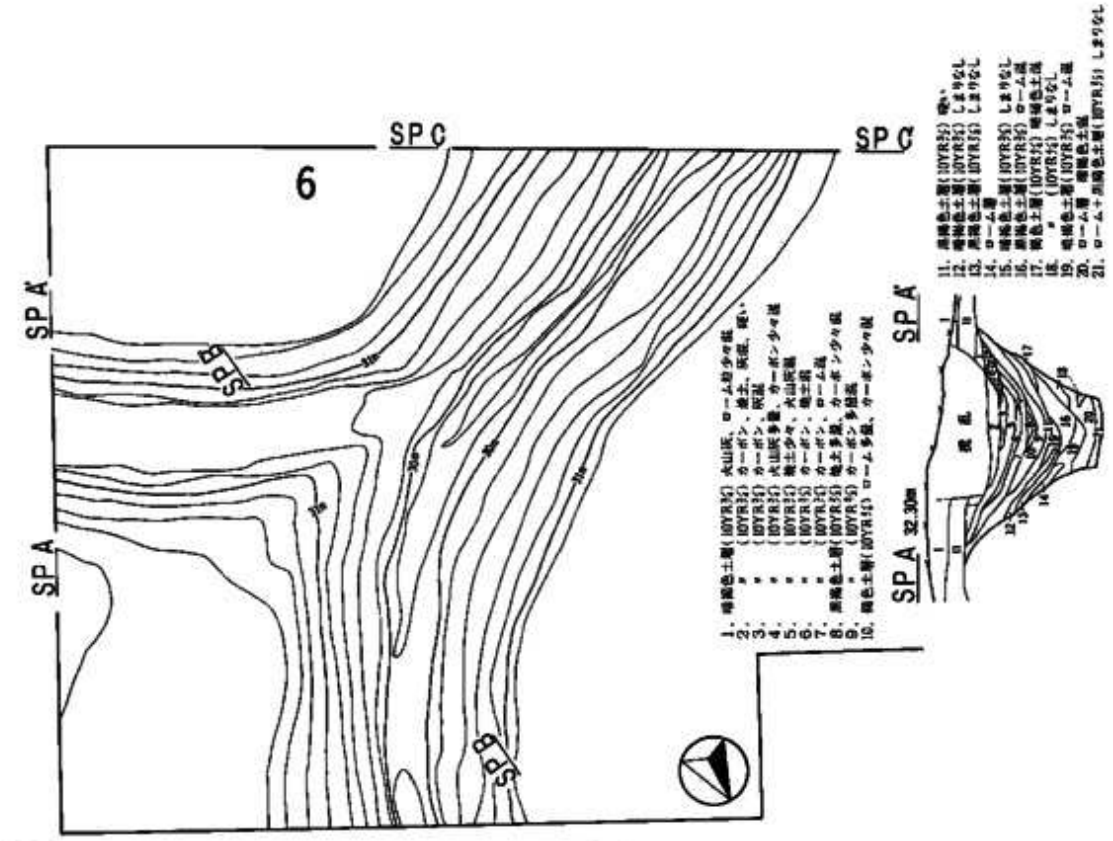
なお、後述するが、空堀1が埋め込まれて郭が造成された後、その上部に住居址様の遺構が構築されている。また、擦文式土器がややまとまって出土していることも付記しておく。

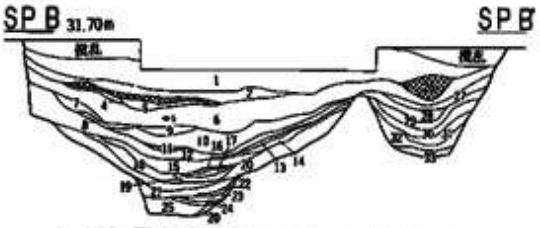
2)空堀2(第7図、第8図)

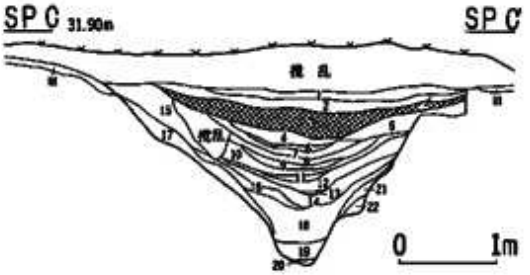
調査区2から3を経て6に至る。おそらく調査8で空堀1と重複し、トレンチDに至るとみられるが調査区6と8の関係が今一つ不明である。前述のように調査区2からトレンチDに至ると見るならば、空堀1によって形成された郭を更に拡張した形態と考えることができる。以下、各調査区の概要を記しておく。



第7図　空堀2実測図(1)







1．暗褐色土層(10YR3/3) 火山灰、ローム粒、カーボン少々混、硬い
2．黒褐色土層(10YR3/3) 火山灰、ローム粒少々、カーボン混、しまりあり
3．〃 (10YR3/3) 火山灰、カーボン混
4．暗褐色土層(10YR3/3) 火山灰混
5．黒褐色土層(10YR3/3) 火山灰少々、カーボン多い混、しまりなし
6．暗褐色土層(10YR3/3) 火山灰少々混、しまりあり
7．褐色土層(10YR4/4) 火山灰粒少混、しまりあり
8．〃 (10YR4/4) 火山灰少々混、硬い
9．暗褐色土層(10YR3/3) カーボン少々混、硬い
10．にぶい黄褐色土層(10YR5/3)
11．黒褐色土層(10YR3/3) カーボン多量混、硬い
12．褐色土層(10YR4/4) 火山灰少々混、硬い
13．〃 (10YR4/4) 火山灰、カーボン少々混、硬い
14．〃 (10YR4/4) ローム混、やわらかい
15．〃 (10YR4/4) カーボン粒少混
16．暗褐色土層(10YR3/3) ローム混
17．〃 (10YR3/3) ローム多量混
18．褐色土層(10YR4/4) しまりなし
19．〃 (10YR4/4) 暗褐色土混、やわらかい
20．〃 (10YR4/4) しまりなし
21．暗褐色土層(10YR3/3) 暗褐色土混、しまりなし
22．褐色土層(10YR4/4) しまりなし
23．暗褐色土層(10YR3/3) 黒褐色土混
24．〃 (10YR3/3) ローム混
25．褐色土層(10YR4/4) ローム、暗褐色土混
26．〃 (10YR4/4) 火山灰多い、ローム少々混、しまりあり
27．暗褐色土層(10YR3/3) ローム、カーボン少々混)
28．〃 (10YR3/3) ローム粒混
29．〃 (10YR3/3) ローム粒(2Bより多い)混
30．〃 (10YR3/3) ローム粒(2Bより多い)混
31．黒褐色土層(10YR3/3) ローム少々混、硬い
32．褐色ローム層(10YR5/6) 暗褐色土混
33．〃 (10YR3/3) 黒褐色土多量混、やわらかい

1．にぶい黄褐色土層(10YR7/3) 地土若干混
2．暗褐色土層(10YR3/3) 地土、火山灰若干混
3．〃 (10YR3/3) 火山灰多量混
4．〃 (10YR3/3) ローム、カーボン、火山灰混
5．黒褐色土層(10YR3/3) 火山灰混
6．〃 (10YR3/3) カーボン混
7．〃 (10YR3/3) カーボン、火山灰、ローム粒混、しまりなし
8．暗褐色土層(10YR3/3) 火山灰少々混
9．〃 (10YR3/3) ローム混、しまりあり
10．〃 (10YR3/3) しまりあり
11．〃 (10YR3/3) カーボン混、硬い
12．黒褐色土層(10YR2/2) カーボン若干混、硬い
13．〃 (10YR3/3) カーボン混
14．暗褐色土層(10YR3/3) カーボン、地土、ローム混、硬い
15．黒褐色土層(10YR3/3) 地土、火山灰、ローム少々混、硬い
16．暗褐色土層(10YR3/3) ローム少々混、しまりなし
17．ローム層 褐色土混
18．ローム＋暗褐色土層(10YR3/3) しまりなし
19．褐色土層(10YR4/4) ローム混、硬い
20．ローム層 褐色土少々混
21．ローム層 暗褐色土混、やわらかい
22．暗褐色土層(10YR3/3) ローム混、しまりなし

第8図　空堀2実測図(2)

調査区２（第７図）

小面積の調査区を設定したが、耕作土の再堆積層が厚く、地表から堀底まで約3.1ｍに達した。調査区内の南東隅では、明らかに二つの空堀が繋がっている様子が窺えた。一方は調査区１の方向から来るもの、他方は南側からつづいて来るとみられるものである。深さは同一でなく、後者がやや浅い。この調査区のみでは、その新旧関係を判断するには材料に欠ける。ただ、埋土を観察すると空堀１にあったような大量のロームの埋め込み土は認められない。したがって、この二つの空堀の重複は、空堀１を含まず、空堀２と後述する空堀３と考えておきたい。

土層図中、スクリーントーンで示したものは灰白色の火山灰層を意味してある。分析はしていないが、小砂子方面での観察結果を参考にすると寛保元年の渡島大島起源によるものとみられる（以下同）。同火山灰降下時には、上述二つの空堀ともほぼ埋没していたことが分かる。

本調査区は崖に最も近い位置にあるが、西（海）へ向かって空堀が自然に消滅するものか、崖際を巡っているものか今回の調査のみでは判じ難い。火山灰層下部より若干の縄文式土器、擦文式土器片、同層上部、耕作土中から陶磁器片がいくつか出土している。

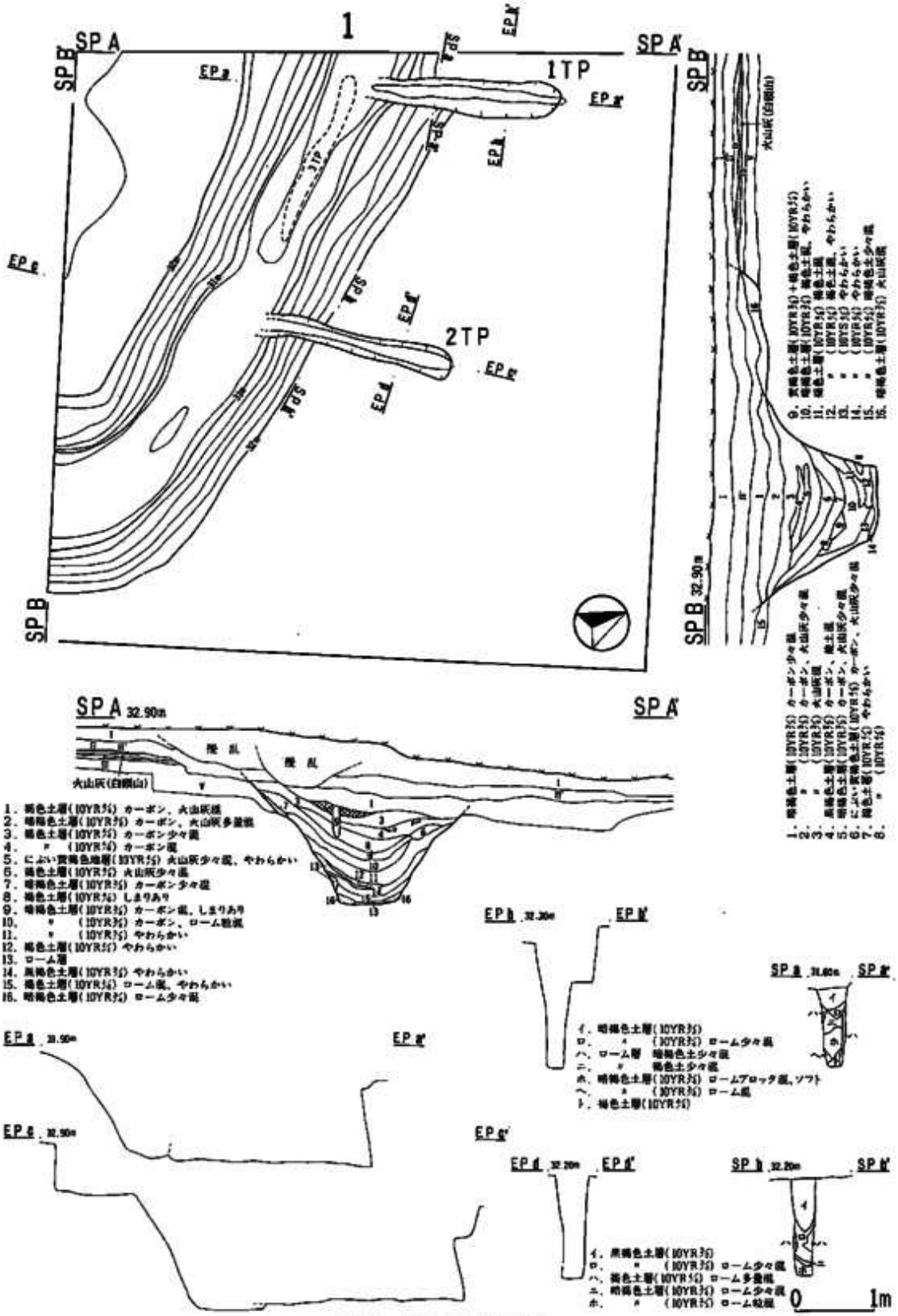
調査区３（第７図）

調査区６の北側へ任意のトレンチ２ケ所を設定して空堀の延長状況を確認した。このうち、北側にあるトレンチを拡幅し、底まで下げてみたものである。本調査区では、空堀の断面形状は底が狭いながらも平らとなる箱薬研形を呈している。確認面での堀幅約3.6ｍ、地表からの深さは約2.3ｍである。このあたりの表土層は比較的厚いものの、耕作によってか土塁の痕跡を認めることはできなかった。本調査区においても渡島大島火山灰層が認められるが、注目しておきたいのは、同層の下部に何枚かの間層を挟んで、カーボンを多量に含む10cm未満の薄い層が一枚入っている。この層は空堀１以外の他の調査区に少なからず存在するもので、特に大きな木炭片は含まないものの、広範囲で火災のような災害があったことを示すものであろう。本調査区内からは、若干の擦文式土器片が出土したのみである。

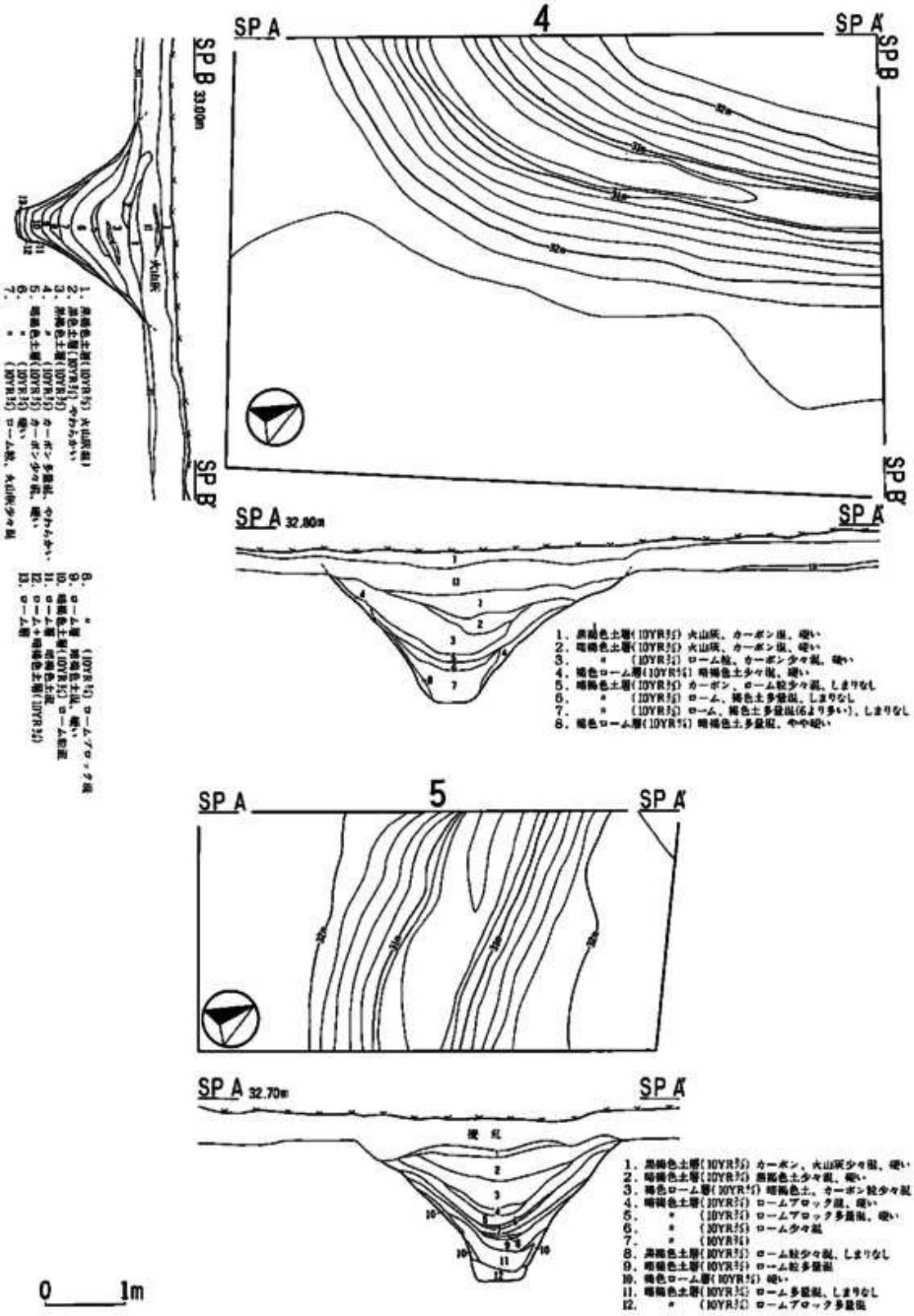
調査区６（第８図）

本調査区は平成２年度に一部調査しており、この時点で空堀が２方向へ延びていると推定された区域である。したがって、他の調査区より広く面積を設定しておいた。本調査区は一方は調査区９の方向へ、更には上述３の方向へ延び、空堀の規模、形態を変えて調査区５の方向へ延びている。空堀２と、後述する空堀３とが繋がる地点である。また、おそらく調査区９と本調査区の間のどこかで、調査区８の方向へ繋がっているとみられる。本調査区での空堀２の確認面の規模は、幅は約3.4ｍ、地表からの深さは約2.2ｍであった。断面形状は薬研形に近い。やはり、火山灰層、カーボンを多量に含む層が認められている。

本調査区内から、擦文式土器のほか３枚の古銭が出土している。これら古銭の年代からして、原口館と最も関係の深いものである。しかし、出土レベルは火山灰層よりは下部であるものの、カーボンを多量に含む層よりは上部であった。したがって、空堀がかなり埋没した段階で遺棄さ


SP A
SP A'
SP B
SP B'
1
1TP
2TP
SP B 32.90m
SP A 32.90m
1. 褐色土層(10YR5/4) カーボン、火山灰極
2. 暗褐色土層(10YR3/3) カーボン、火山灰多量極
3. 褐色土層(10YR5/4) カーボン少々混
4. 〃 (10YR5/4) カーボン混
5. にぶい黄褐色地層(10YR5/3) 火山灰少々混、やわらかい
6. 褐色土層(10YR5/4) 火山灰少々混
7. 暗褐色土層(10YR3/3) カーボン少々混
8. 褐色土層(10YR5/4) しまりあり
9. 暗褐色土層(10YR3/3) カーボン混、しまりあり
10. 〃 (10YR3/3) カーボン、ローム粒混
11. 〃 (10YR3/3) やわらかい
12. 褐色土層(10YR5/4) やわらかい
13. ローム層
14. 黒褐色土層(10YR3/2) やわらかい
15. 褐色土層(10YR5/4) ローム混、やわらかい
16. 暗褐色土層(10YR3/3) ローム少々混
EP b 32.30m
EP b'
イ. 暗褐色土層(10YR3/3)
ロ. 〃 (10YR3/3) ローム少々混
ハ. ローム層 暗褐色土少々混
ニ. 〃 褐色土少々混
ホ. 暗褐色土層(10YR3/3) ロームブロック混、ソフト
ヘ. 〃 (10YR3/3) ローム混
ト. 褐色土層(10YR5/4)
EP a 32.90m
EP a'
EP c 32.90m
EP c'
EP d 32.20m
EP d'
イ. 黒褐色土層(10YR3/2)
ロ. 〃 (10YR3/3) ローム少々混
ハ. 褐色土層(10YR5/4) ローム多量混
ニ. 暗褐色土層(10YR3/3) ローム少々混
ホ. 〃 (10YR3/3) ローム粒混
0 1m

第9図　空堀3実測図(1)



第10図　空堀3実測図(2)

れたものと考えざるを得ない。

第8図に空堀2と3との関係を示す土層図を表わしておいた。しかし、これを見る限りにおいてはその新旧関係を明らかにできない。

調査区8（第6図）

前述のように空堀1と重複する。第4図に示した土層図にもあるように空堀2の方が若干深い。この調査区で注目しておきたいのは、火山灰層下部にカーボンを多量に含む層がある。この層は前述した通りであるが、本調査区では、同層と、この直下の層から大量の擦文式土器が出土していることである。作図した資料のうち3個体はここから出土したものである。つまり、ほぼ完形に近い大形破片を含む資料が空堀のある程度埋没しつつある段階で投棄されたことを物語っている。

故に、空堀が15世紀代のものではなく、擦文期に構築された根拠の一つとなるのである。

3）空堀3（第9図、第10図）

調査区2から1．4．5を経て調査区6に至るものを空堀3としておく。この空堀3によって囲繞される範囲は約25m×10m程度と推定され、面積は最も小さい。空堀1．2に比べてやや高いレベルにあるが、作為的なものではなく、自然地形かとみられる。

以下、各調査区の概要を記しておきたい。

調査区1（第9図）

空堀3が西側と南側へ折れるコーナー部に相当する。確認面での幅2.1～2.5m、深さは地表から2.1m程度である。断面形状で分かるように、堀底の幅は約0.8mで、ほぼ平坦となっている。これは調査区4～6でも同様であり、他の空堀1．2．4と比べ大きな特徴である。

本調査区において注目しておきたい事実は苫小牧（白頭山）火山灰層との関係である。土層図で示してあるように、基本層の中に薄い黄白色の火山灰層が認められる。この層は「札前」などで確認されているものである。少なくとも調査区1にあっては同火山灰層を切って空堀が造られており、空堀の埋土の中に同層は入っていない。したがって、空堀3は苫小牧火山灰降下年代より新しいと判断できるものである。

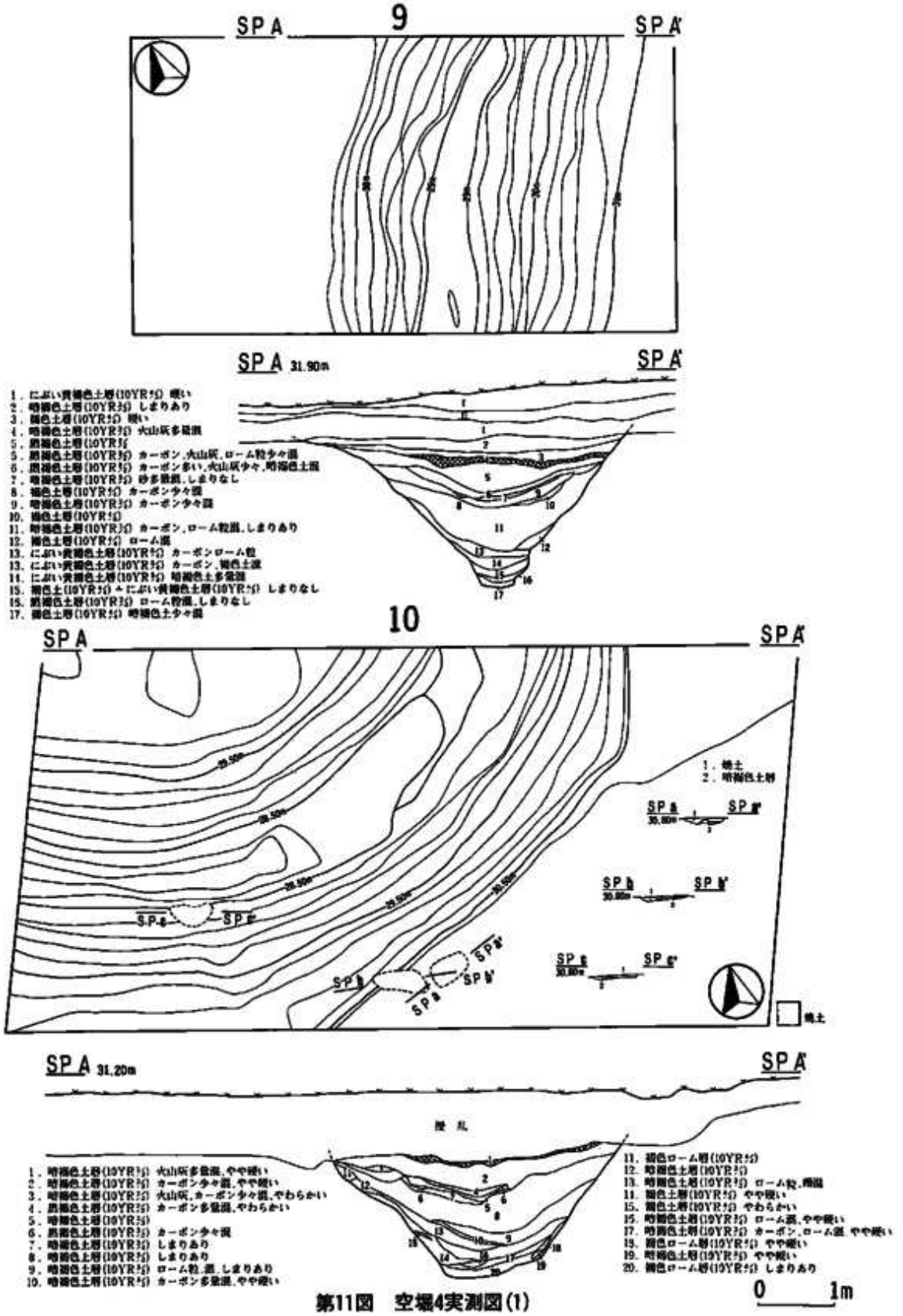
本調査区内には3基のTピットがあった。前述したように、これを壊して空堀3が構築されている。

調査区4（第10図）

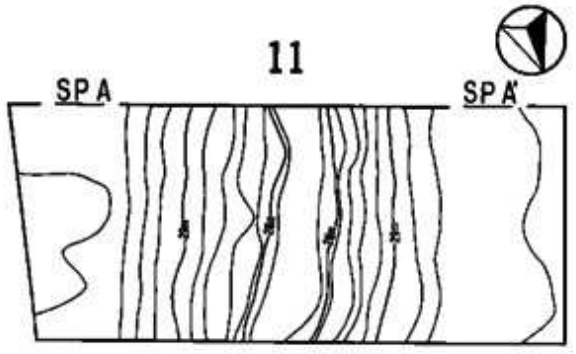
空堀3が北側と西側へ折れるコーナー部である。次の調査区5での確認状況と併せて見ていくと、コーナーの角度は調査区1に比べて急角度で折れるようである。本調査区での確認面での幅は2.7m～3.1m、深さは地表から1.9m程度である。堀底は幅がやや広く平坦となっており、箱薬研形を呈している。

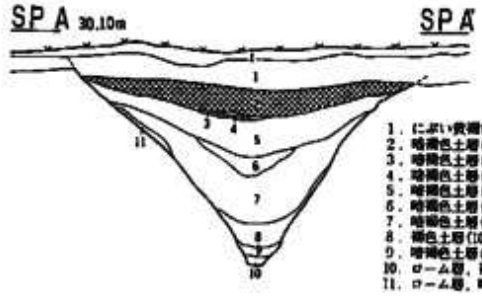
調査区5（第10図）

本調査区と4及び6での確認状況を見ると、空堀3は直線的なものではなく、緩くカーブしていることが分かる。本調査区での空堀の規模、形状等は他の調査区と大差ない。

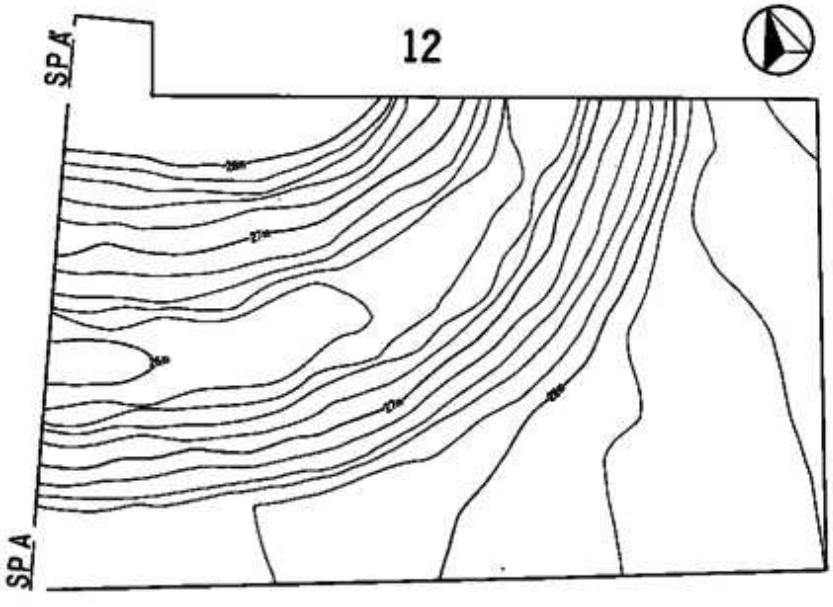


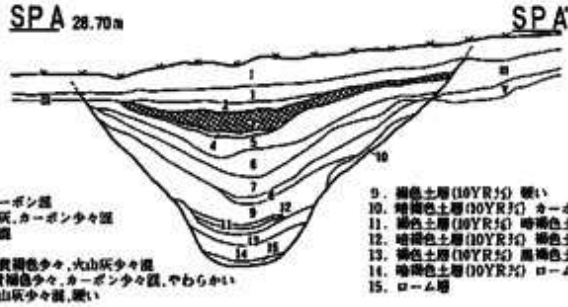
第11図　空堀4実測図(1)





1．にぶい黄褐色(10YR7/3) 火山灰少々混
2．暗褐色土層(10YR3/3) 火山灰多量混
3．暗褐色土層(10YR3/3) カーボン混
4．暗褐色土層(10YR3/3) 砂混
5．暗褐色土層(10YR3/3) 鉄分，火山灰，カーボン混，硬い
6．暗褐色土層(10YR3/3) 鉄分混，しまりあり
7．暗褐色土層(10YR3/3) しまりあり
8．褐色土層(10YR5/6) カーボン，ローム層
9．暗褐色土層(10YR3/3) ローム混
10．ローム層，褐色土混
11．ローム層，暗褐色土混





1．暗褐色土層(10YR3/3)
2．暗褐色土層(10YR3/3) カーボン混
3．褐色土層(10YR5/3) 火山灰，カーボン少々混
4．暗褐色土層(10YR3/3) 砂混
5．暗褐色土層(10YR3/3)
6．暗褐色土層(10YR3/3) 明黄褐色少々，火山灰少々混
7．褐色土層(7.5YR5/3) 明黄褐色少々，カーボン少々混，やわらかい
8．黒褐色土層(10YR3/3) 火山灰少々混，硬い
9．褐色土層(10YR5/3) 硬い
10．暗褐色土層(10YR3/3) カーボン少々
11．褐色土層(10YR5/3) 暗褐色土，カーボン少々混，やわらかい
12．暗褐色土層(10YR3/3) 褐色土混
13．褐色土層(10YR5/3) 黒褐色土混
14．暗褐色土層(10YR3/3) ローム混，やわらかい
15．ローム層

0 1m

第12図　空堀4実測図(2)

空堀３からも縄文式土器、擦文式土器が出土している。層位的には特にどのレベルということはなく、万遍なく出土している。

土層図の表示に渡島大島起源火山灰を特にスクリーントーンで表わしていないが、同層は空堀２・４と同様に存在している。ただしこれらほど顕著ではなく、上・下の層とほとんで混り合っている状態である。このことは、空堀３が当初から浅く構築されたため、火山灰降下時には空堀がほとんど埋没して、火山灰の堆積が薄かったためと考えられる。

４）空堀４（第11図、第12図）

調査区６から南側へ延び、調査区９を経て12に至るものを空堀４としておく。これまでの空堀１～３に比べ極端に南北に長く、しかも調査区10から11にかけて大きく折れており延長約80ｍに及ぶものである。調査区６～10までの間は、空堀と崖際までの幅が20ｍ近いのに対し、調査区11以降では幅12ｍ程度と極端に狭くなっている。こうした南北に細長く、しかも狭いため、これで一つの郭を形成しているのか疑問の残るところである。そこでトレンチＥを設定して、調査区10から空堀が西側へ向かい、郭は二つに分離されるのではないかと想定してみたが、特にそうした痕跡は認められなかった。また、トレンチＦを設定したみたが、東側にも空堀の痕跡は窺えない。したがって、現段階ではこれを一本の空堀と考えておきたい。

以下、各調査区の概要を記しておきたい。

調査区９（第11図）

調査区６と10のほぼ中間に位置する。確認面での幅約4.1ｍ、深さは地表から2.6ｍに達する。堀底はやや平坦となり、断面形は箱薬研形を呈している。

調査区10（第11図）

平成２年度の調査では、調査区６から本調査区までの間に空堀の存在を確認しておいた。今回の調査では最も先に着手した調査区である。当初、調査区６から本調査区を見通して真直ぐ南側へ延びていくものと想定したが、掘り下げてみたところ大きく西側へ折れることが分かった。確認面での堀幅約3.8ｍ、深さは地表から約2.5ｍに達する。堀底はほぼ平坦であるが、西側へ向かうにしたがって傾斜している。

なお、本調査区内から焼土址が３ケ所発見されている。この確認レベルはかなり高いものであり、空堀と同時性をもつものはなく、かなり埋没した段階（近世以降）のものと考えておきたい。この焼土址に伴なう遺物は残念ながら発見されていない。

調査区11（第12図）

調査区10から南側については、いずれかの場所へ空堀がつづいているものと想定して設定した調査区である。確認面での堀幅約3.5ｍ、地表からの深さは約2.2ｍである。空堀の断面形は薬研形に近い。本調査区から調査区12にかけて、小型重機によって小トレンチを２ケ所設定してみたが、崖際にほぼ平行して空堀が続いていることを確認している。

調査区12（第12図）

本調査区は緩く南西側へ傾斜している地形にある。調査区11および小トレンチから延びてくる空堀が、本調査区で大きくカーブして西側へ向かっていることが分かる。トレンチFや周辺の地形から判断して、おそらく空堀の終端部に近いのではないかとみられる。堀幅は確認面で約3.8m、深さは地表から2.2m程度である。堀底はやや広く平坦に近いが、西側へ向かうにしたがい徐々に低くなっている。内部から縄文式土器、擦文式土器片が若干出土している。

空堀の幅、深さは各調査区ともそう大きな違いはない。各調査区ともほぼローム層を掘り抜き、その下部の砂礫層に達するまで掘り込んでいる。したがって、大雨が降っても堀底に水が溜まることはない。

Ⅱ　住居様の遺構

B－1区、空堀1の上部から発見された。トレンチCを設定し、空堀1の延長を追っていた際に、焼土と楕円形の細長い、しかも形状の比較的揃った礫が密集して発見された。そのため周辺を精査し、柱穴らしいピットがいくつか認められたので住居址である可能性が高いと考えたものである。

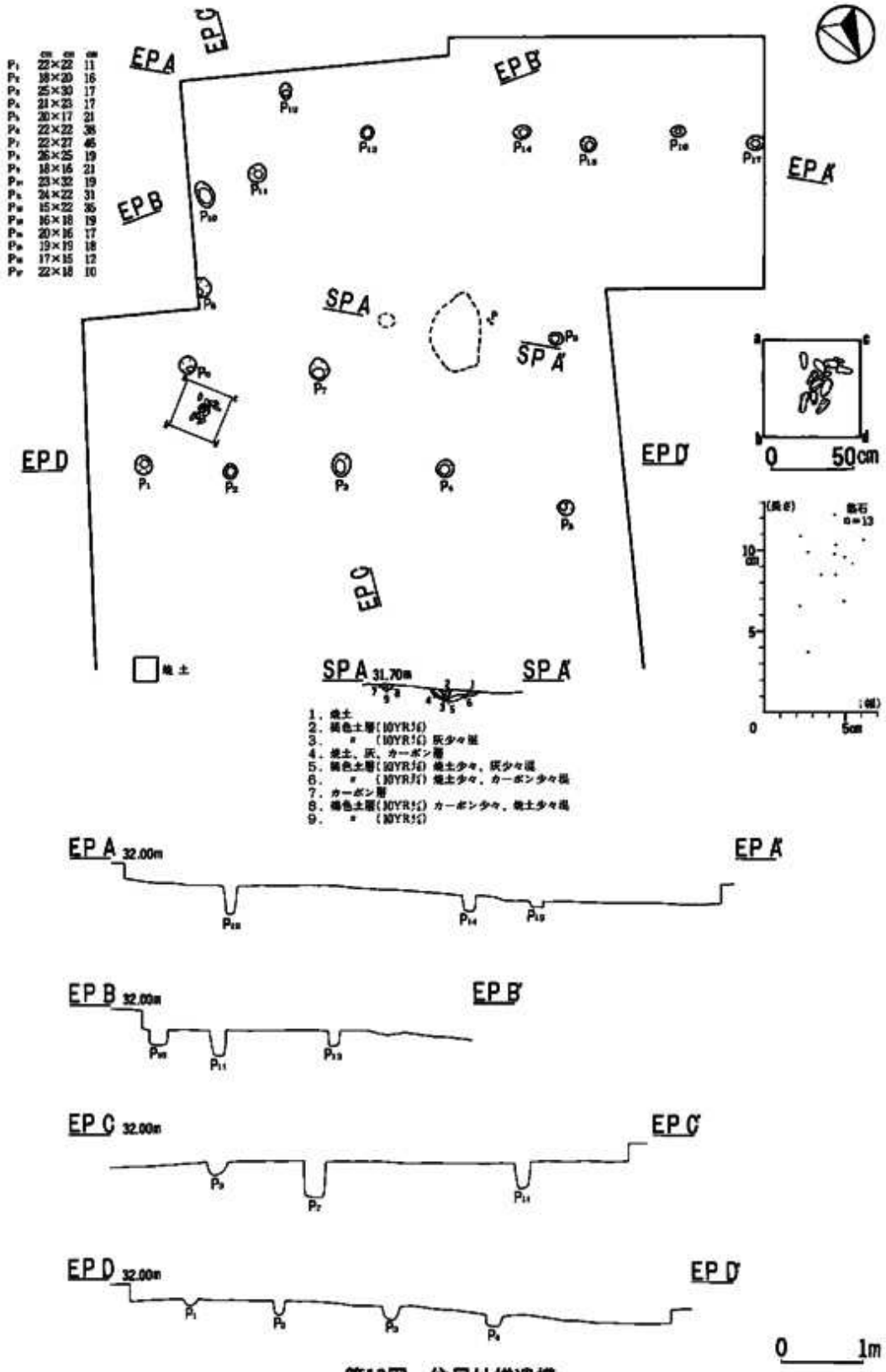
礫は13個が密集しており、表に示したようにほぼ形状の揃っている自然礫である。こうしたものは擦文期やアイヌ文化期の調査でしばしば発見され、かなり特徴的なものである。札前第1地点遺跡でもいくつかの住居址の隅に密集して発見された例がある。勿論住居址外から集中して発見されることもあり、これのみの発見によって即住居址と判断することはできない。

焼土は大・小2ケ所発見され、大きいものは約1.0×0.6mの範囲に広がり、厚さも約10cm程度とよく使用されたものである。この焼土と集石は、ほぼ同一レベル上にあり、直線距離にして3m程度である。この焼土が住居址の炉と考えるならば、札前で発見されている住居址の大きさを参考にしても、集石は住居址の範囲の中に含まれると見てよい。

焼土、集石の周辺からは、図示したように17ケ所の小ピットが発見された。直径は20cm前後で、極端に深いものはP_6、P_7だけであり、他は20cm弱と浅いものが多い。ピットの配列状況も今一つ不規則である。

以上、概要を記したが、こうしたものが住居址としてよいか俄かに判断できない。竪穴式住居のような掘り込みは全く認められていないし、この調査区（郭）自体が人為的とみられる削平によって堆積が極めて貧弱であり、平地式の住居址と考えた場合でもプランを確定する決め手に欠ける。住居址か否かの最終的判断は、周辺地域の調査によって類似するものが他に存在するかどうかによって行なうべきであろう。現段階では焼土、集石、柱穴らしいピットの存在によって、住居址の可能性が高いとみておきたい。

出土遺物はピットの内部に擦文式土器片がいくつかあったが、本遺構に確実に伴なうかどうか不明である。だが、前述したように、周辺からややまとまった擦文式土器が焼土とほぼ同レベルから発見されている。この遺構が住居址とした場合、7m×5.5m程度の長方形、時期は擦文期



第13図　住居址様遺構

と推定しておきたい。

2．擦文時代の遺物

擦文時代の属する遺物には土器、鉄製品、フイゴの羽口、鉄滓、須恵器があった。このほか未分析であるがフローテーションによって炭化物を採集している。また、若干の獣骨も採集している。これらについては別の機会に記載していくことにしたい。本項では擦文式土器を主に記述していくことにする。

1）擦文式土器

総点数2,311点の出土である。このほか平成2年度の調査でも若干出土していたが、この資料については「札前Ⅲ」で概に紹介してあるのでここでは省きたい。土器はほぼ全調査区から出土しているが、前述のように調査区が8が最も多く約700点余りに達し、全体の約3分の1を占めている。ここでは、これらを一括して紹介しておくことにする。器種としては甕（深鉢）形のほか浅鉢、稀に小型の手捏のものがあった。正確な出土個体数は不明であるが、口縁部の特色や底部資料等から170個体以上はありそうである。施文手法によって大まかに分類すると次のようになる。

1類　無文のもの

2類　数条の沈線文を口縁部に巡らすもの

3類　刺突文が加わるもの

4類　刻線文によって文様帯を構成するもの

この分類にしたがって若干の説明を加えていくが、先に甕形土器について、その後、浅鉢および底部に刻印のある資料について紹介したい。

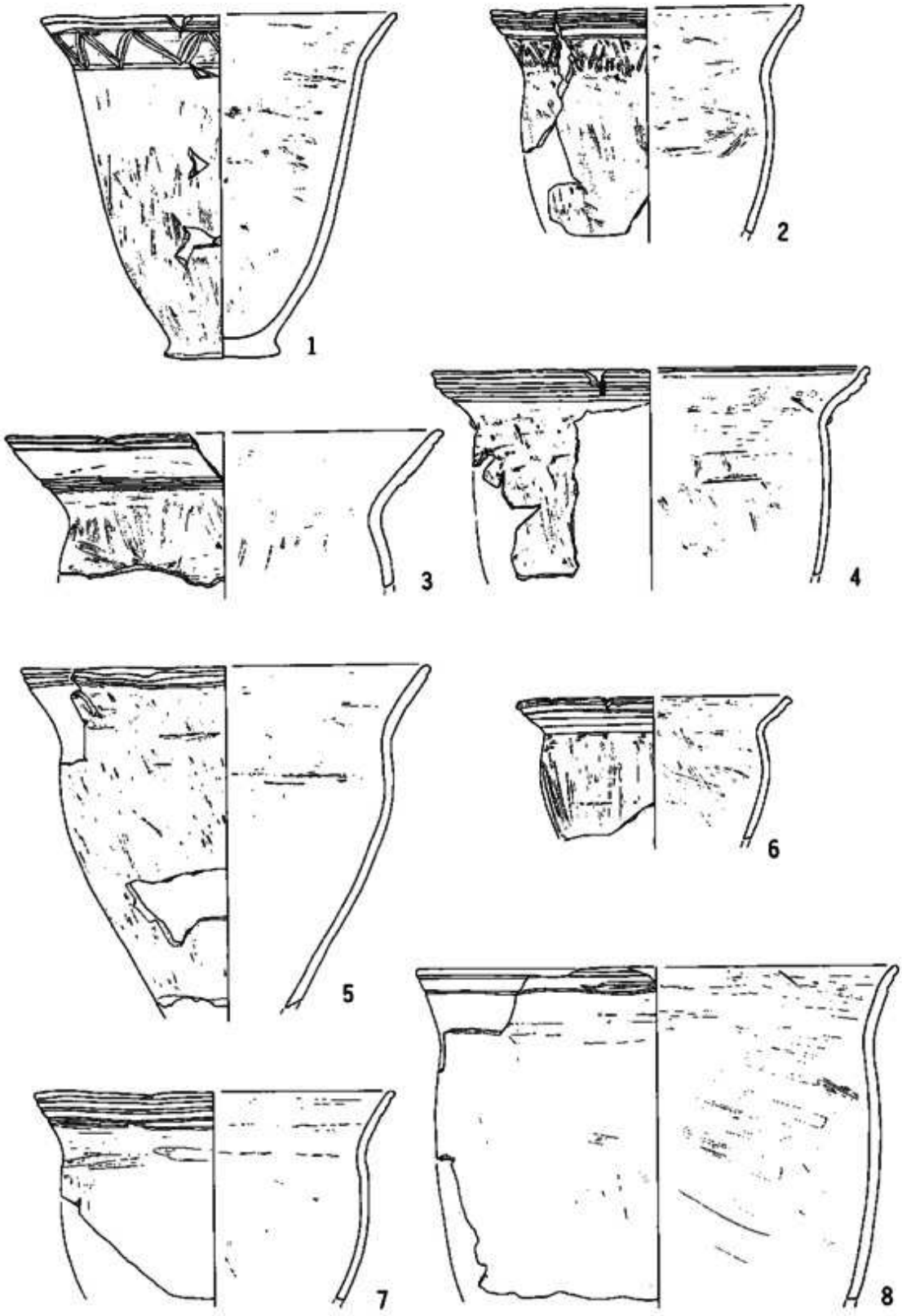
1類（第15図9～21）

13点図示したおいたが、量的にそう多いものではない。11．18のように口縁部の浅いナデの痕跡が沈線のように見えるものもあるが、本類の中に含めておく。口縁部は横位のナデ、体部は浅いハケ目調整のものが多いようであるが、9のように全面にハケ目調整の見られそうな例もある。口唇部の形状を見ると丸味をおびるもの、角形を呈するものがある。札前の例を参考にすると、特に時期的な差を表わすものではないようである。

2類（第14図3～8、第15図22～44、第16図45～59）

口縁部に数条の沈線文を巡らすものである。こうしたタイプのものが最も多く、正確な集計はしていないが、甕形を呈するものの7割以上は占めそうである。こうした傾向は本遺跡のみならず、渡島半島南部（周辺を含め）の擦文式土器の特色の一つである。

完全に復元されたものがないため大きさはよく分からないが、15cm未満の小型のものから器高40cm位となる大型のものがあるようである。しかし、概して25cm内外のものが多いようである。全体のプロポローションは長胴のものはないようで、口径と器高の比が1：1に近い寸づまりの



第14図　撚文式土器(1)

器形となるようである。沈線文の施文具はヘラ状の工具を用いるらしく、その用い方によって深くなったり、浅く段状を呈するとみられる。沈線文が1条のみの例はなく、2条以上巡らしている。この巡らし方も、口縁部の上方にのみ集約されるもの、口縁部全体に巡らしてあるもの、口縁上方と頸部に巡らし、間を無文帯とするものもある。口唇部形状も変化に富んでおり、丸味のあるもの、尖るもの、角型を呈するもの、口唇に浅い沈線の巡るものも若干ある。口縁の傾きも様々であり、8のように急に立ち上がるもの、大きく外反するものも少なからずある。

こうした様々な特徴を有するものが、果たして時期的な特徴を示すのか何とも言えないが、札前の例を参考にするならば、ある段階の中でのバラエティとして理解されており、本遺跡の場合においても、現時点では同一時期の中でのバラエティとして理解しておきたい。

3類（第16図60～63）

刺突文の加わってくるものを本類としておく。刺突文という表現をしたが、厳密には60．62．78．81．82．85のように刺突手法によるものと、61．63のように刻みあるいは短刻文とした方がよいものを含んでいる。60．62．82．85の場合には刺突の単位の中に細かい筋が見え、体部のハケ目調整に用いる工具による施文かと思われる。これに対し、刻みの場合にはヘラ状の工具を用いているようである。本類はこれのみで独立して施文されるのは61のみのようであり、沈線文や刻線文と組み合わされて文様帯を構成するようである。

4類（第14図1．2、第16図64～78、第17図79～91）

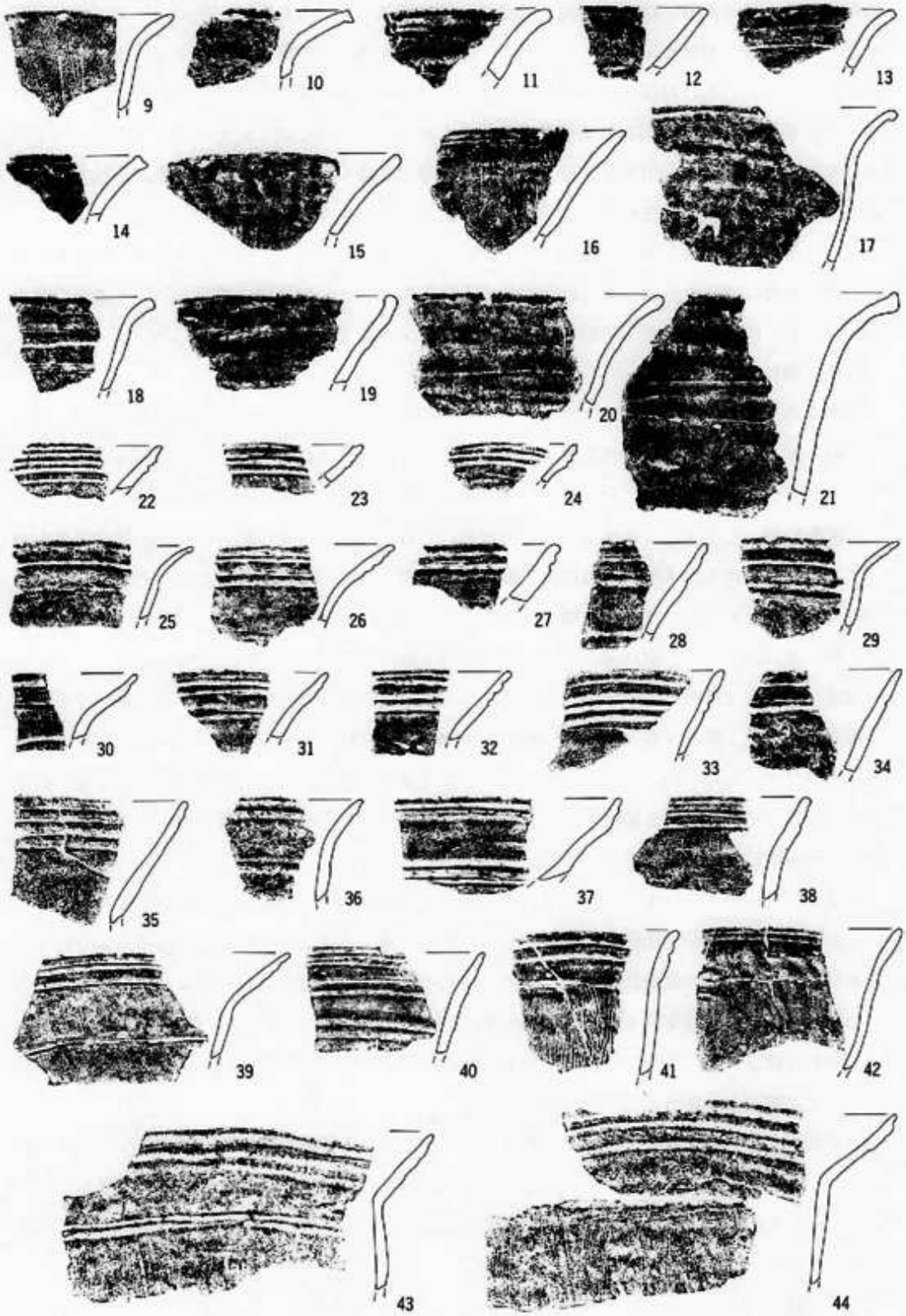
刻線文による文様帯をもつものを本類とする。64のように刻線文のみで文様帯を構成するものは稀のようで、2類の沈線文、3類の刺突文が加わって文様帯を構成するもの、更には幅広の粘土紐を貼付するもの（89～91）がある。こうした文様帯を構成するものは本遺跡では甕型の約1割程度に達しそうである。後述するように札前ではこうしたものが約4％の出現率であり、本遺跡での出現率は極めて高いと言えよう。

文様帯は口縁部のみに集約されるものが多いが、胴上半部に及ぶものが少なからず見られる。こうしたものは複雑な文様帯を構成するようである。施文手法としては1．2にあるように2～3本の沈線によって、鋸歯状の沈線文を付するものが多い。札前には見られなかった施文手法としては矢羽根状の連続沈線文（横位の綾杉文）を付す例が少なからずある。これには84のように、予め縦の沈線文によって区画された内部をこれで充填するものや、90．91のようにいわゆる囲繞貼付帯文と組み合わされるものも存在している。

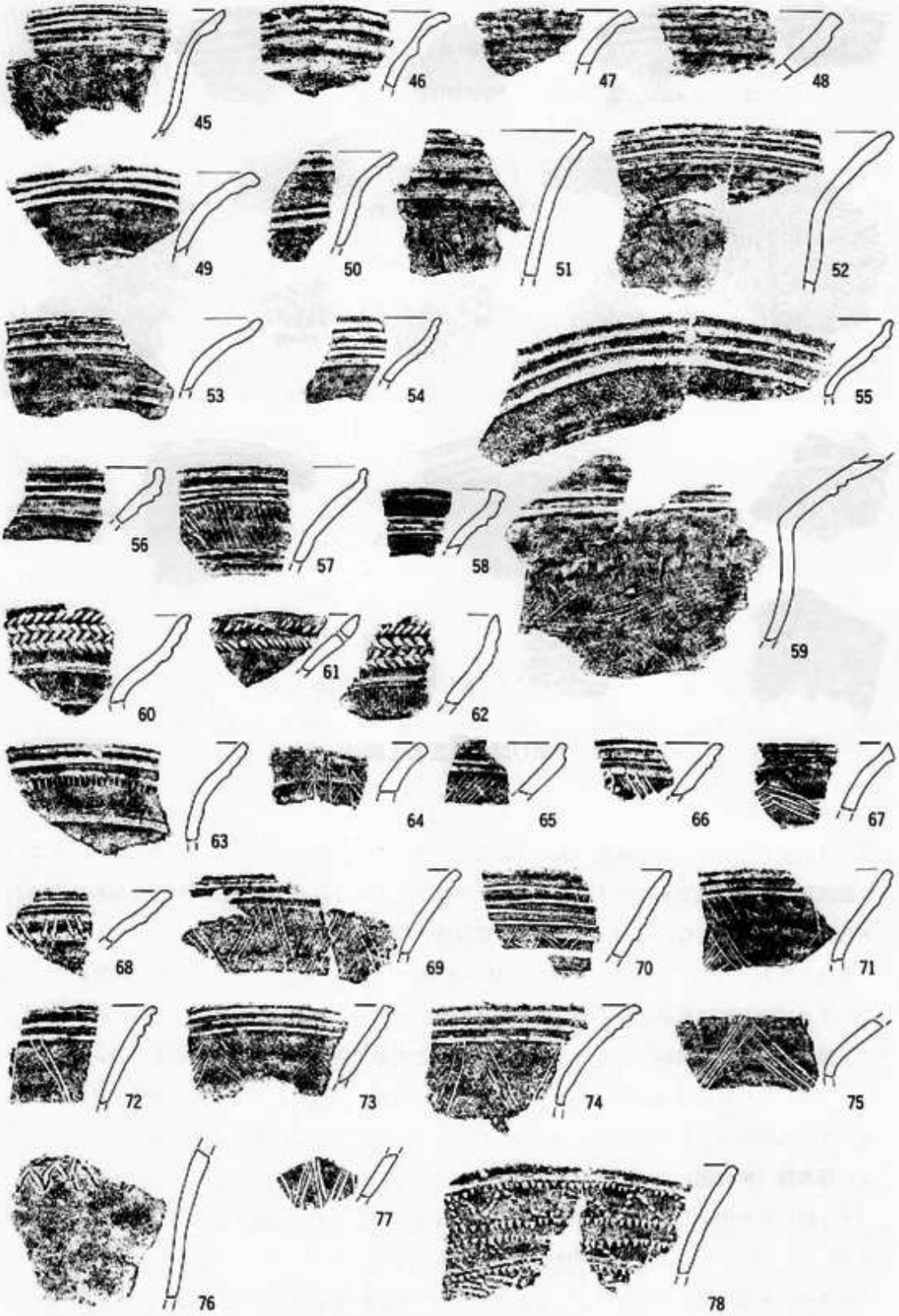
底部資料をいくつか示しておいた。器高に合わせて大小各種あるが、極端に大きなものが1例あった。壺形のような特殊な器形となるものであろう。底部はほぼくの字型に張り出すが、張り出しの弱いものが若干ある。底面に笹の葉圧痕の見えるもの、砂が多量に付着しているものが2例あった。

浅　鉢

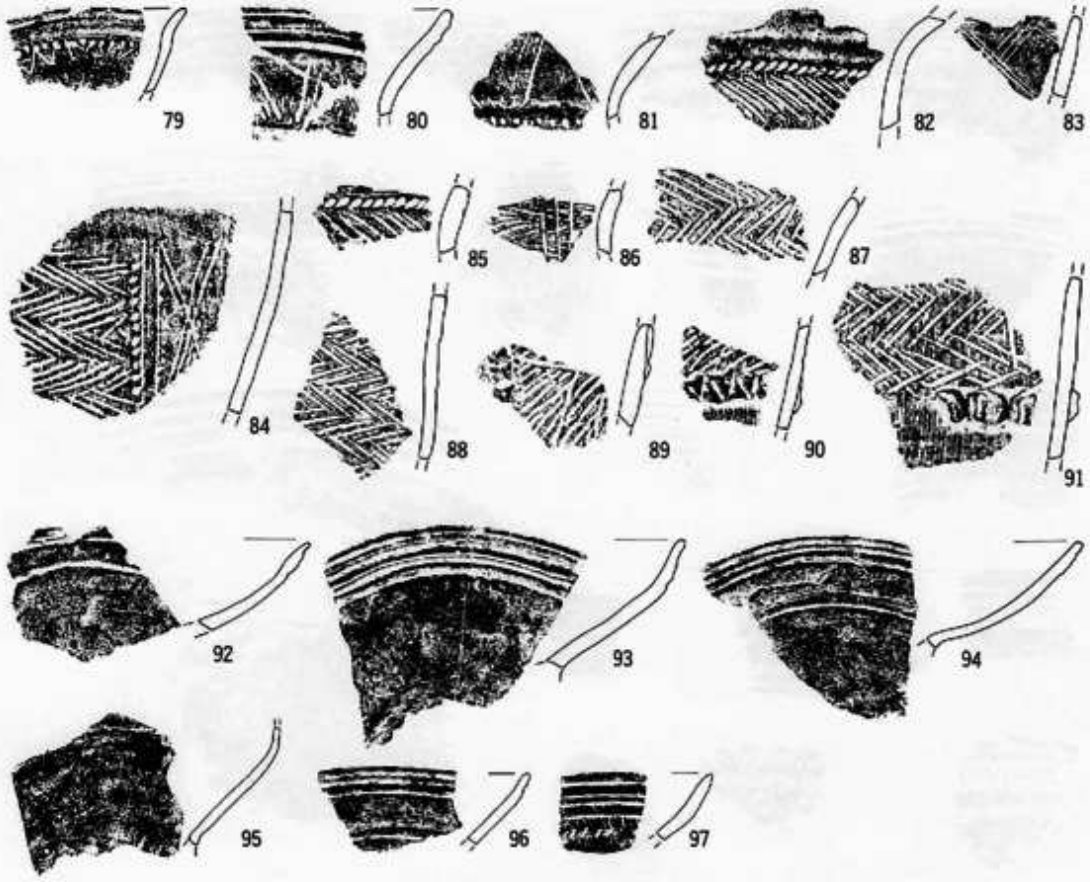
高杯あるいは台付浅鉢形と称されているものである。いくつか出土しているが、今年度は完形


9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44

第15図　擦文式土器(2)


45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78

第16図　擦文式土器(3)



第17図　擦文式土器(4)

資料は出土していない。口縁部が緩やかにカーブするものと急に立ち上がるものがある。施文は口縁部に数条の沈線文を巡らすものが多いようで、97のようにハの字形に短刻文の加わるものがある。底部は平底となるものと、やや揚げ底気味となるものがある。

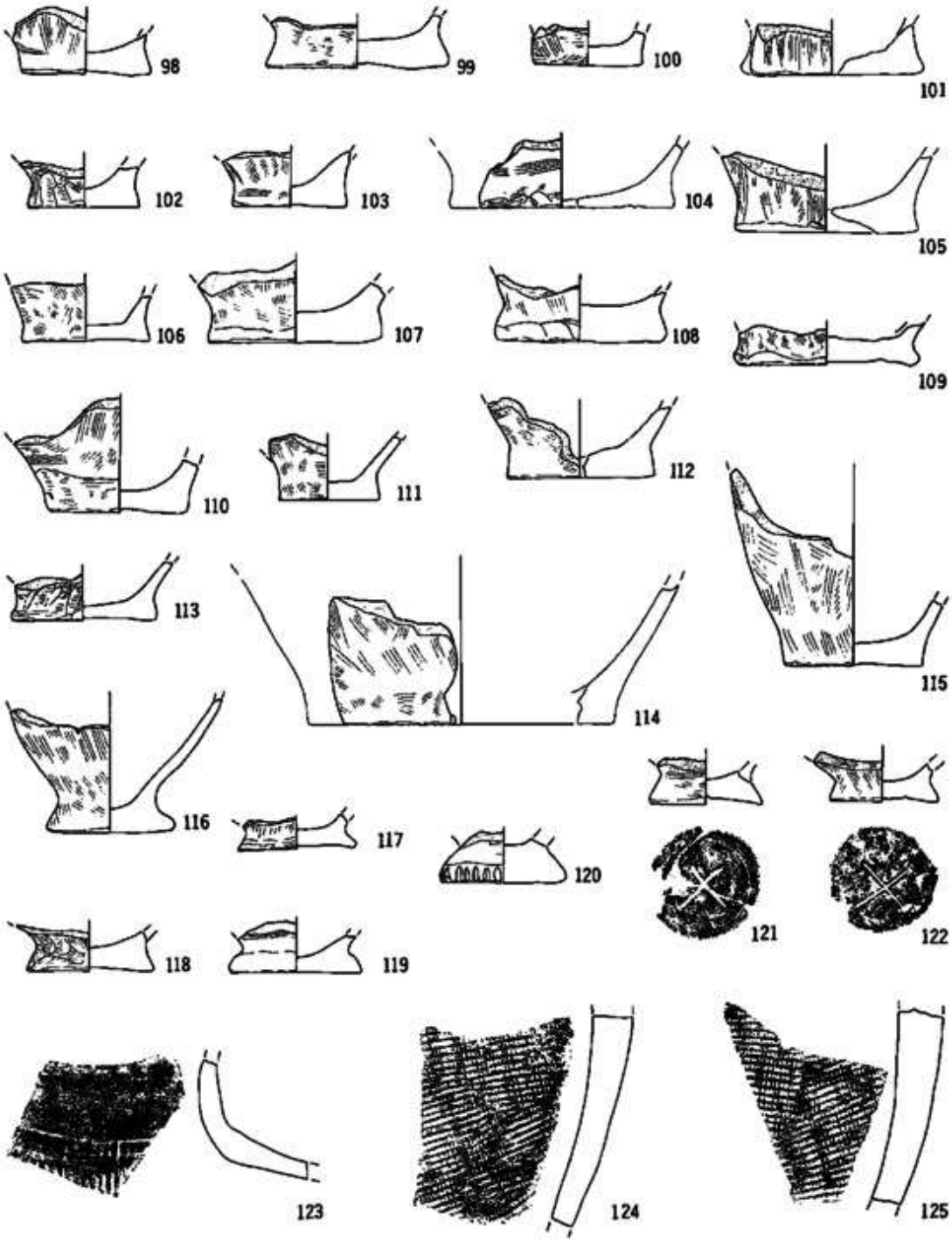
底面の周囲に刻み目の入るものが一個体、底面に「×」の刻印の入るものが2個体あった。このタイプのものは札前で最も多く出土している。

1類から4類まで概観してみると、札前の資料と大方で共通性をもっているものの、4類に示したように、札前には見られなかった要素がいくつか加わっている。そういう意味では地域性とするよりは時間差を考えた方がよいとみられる。この点については後述することとしたい。

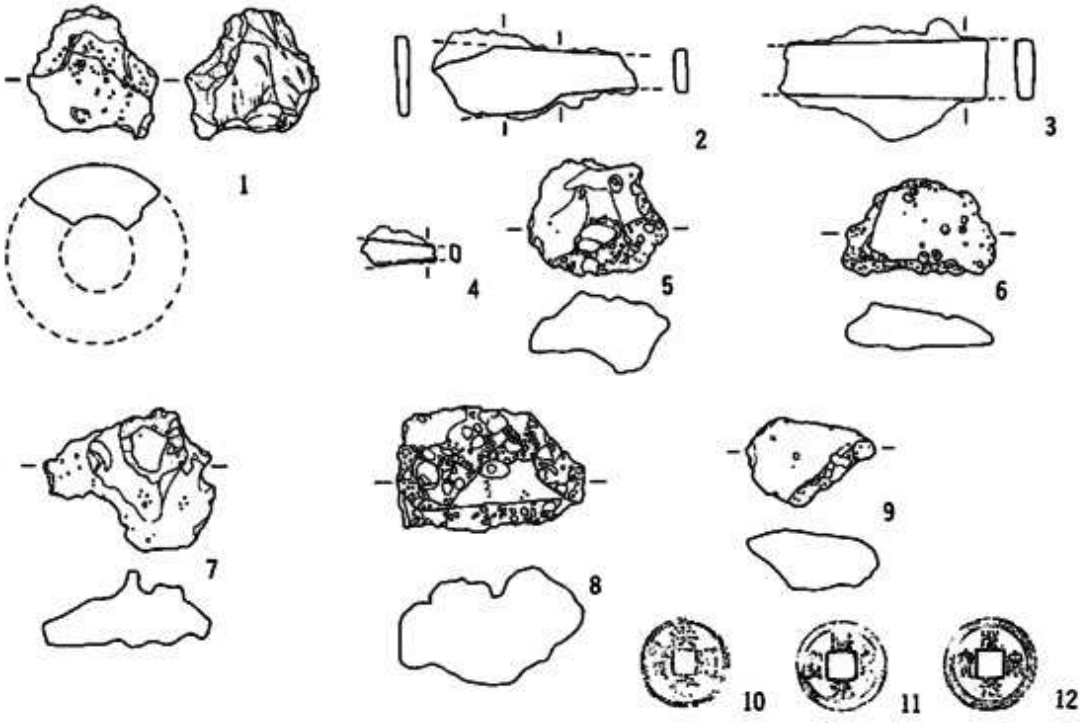
2）須恵器（第18図）

大小破片8点出土している。いずれも器高50cmを越える大型壺の破片とみられ、そのうち3点図示しておいた。これらが同一個体かどうかは不明である。

色調は内外面灰青色を呈し、芯の部分が暗褐色となる。外面の叩き目のよく見えるものであり、札前や森町御幸町遺跡等で出土例のある五所川原系の須恵器である。



第18図　擦文式土器(5)　須恵器



第19図　羽口・鉄製品・古銭

3）羽口・鉄滓

羽口は1点のみ、鉄滓は小破片が22点あった。これらは特に遺構に伴なうものではなく、空堀の埋土の中から擦文式土器とともに出土したものが多い。

1は羽口で、先端部の小破片である。口径は内径で2㎝程度であり、外面にガラス質の熔着が見える。同様の大きさのものは札前でもいくつか例がある。

鉄滓はいくつかの調査区から出土しており、特にどの調査区からということはない。出土のあり方から推測して、いくつかの場所で小規模な小鍛治が行なわれていたとみるべきであろう。本遺跡では、碗形滓のような大型のものはなく、小破片が多い。

V．近世の遺構

今年度の調査では明らかに縄文時代よりは新しいとみられる溝状の遺構が発見されている。この溝内から古手の染付が出土しており、近世の可能性が高いと考えた。また、昨年度の調査で不明建物遺構を1軒発見している。近世のものであるという積極的な裏付けはないものの、類例の知られていないものであり、本項の中で併せて紹介しておきたい。

1．溝状遺構（第20図）

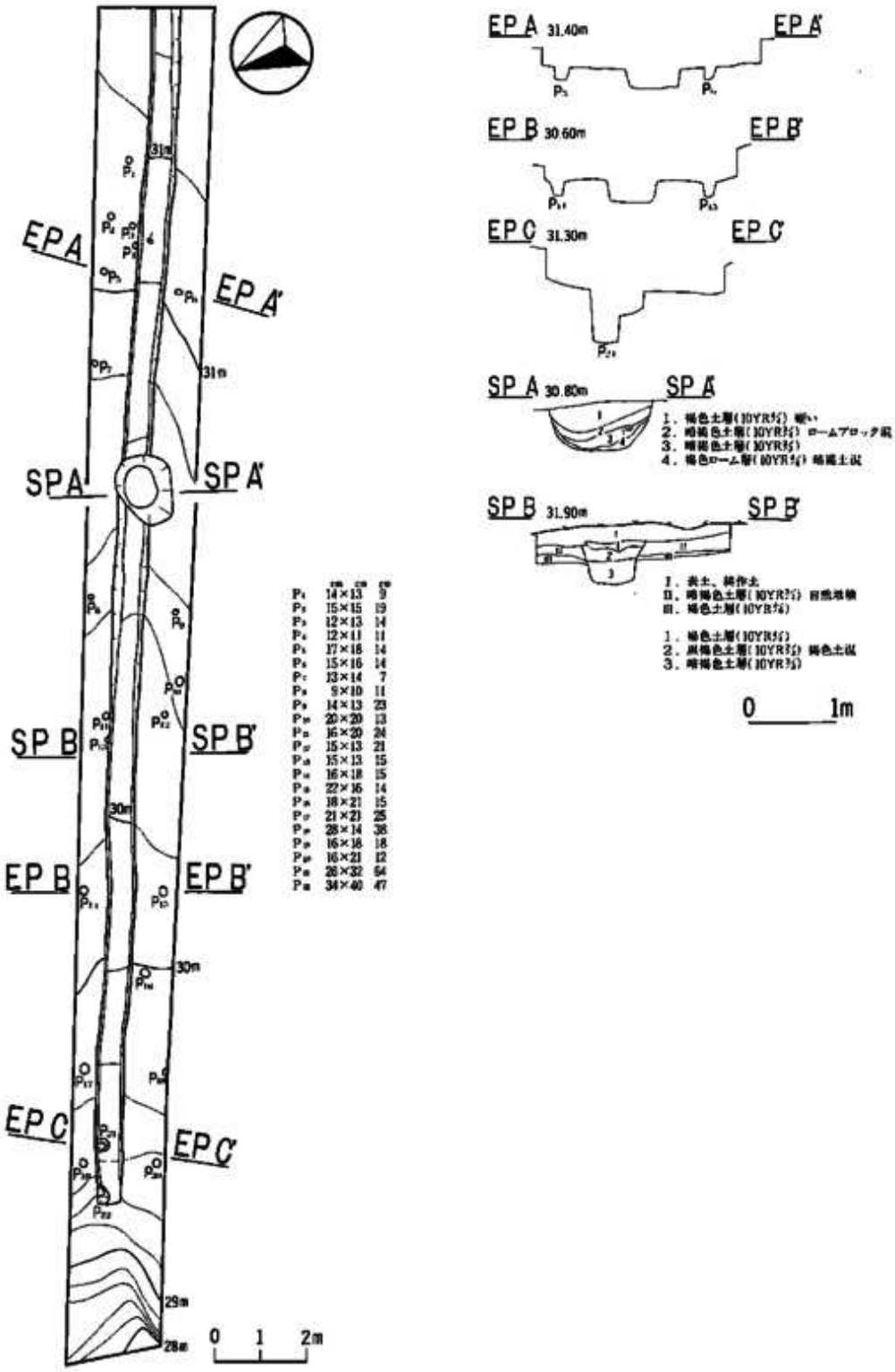
A－0、B－0区からの発見である。空堀遺構が更に北側へも広がっていないかどうかトレンチAとBとを設定した。溝状遺構はこのうちトレンチBから発見されたものである。溝は幅60～70cm、深さは掘り込み面から50cm程度である。ほぼ直線的に延長26cmほど確認し、旧国道下にまで続いているようである。溝内の埋土は割合しっかりしており、最近の耕作その他によって造られたような柔らかなものではなく、かなり年月を経たものと推測された。

溝の両側には夫々対応するかのように小ピットが発見されている。これらのピットはしっかりしたものであり、おそらく、この溝状遺構に伴なうものである。溝内部および周辺からは明治期以降の遺物は出土せず、17・8世紀代とみられる染付片が出土している。したがって、この溝状遺構もそのあたりの年代である可能性が高いと見ておきたい。だが、トレンチのみの調査であり、全体の規模等は不明のままであり、性格等は今後の課題としておきたい。

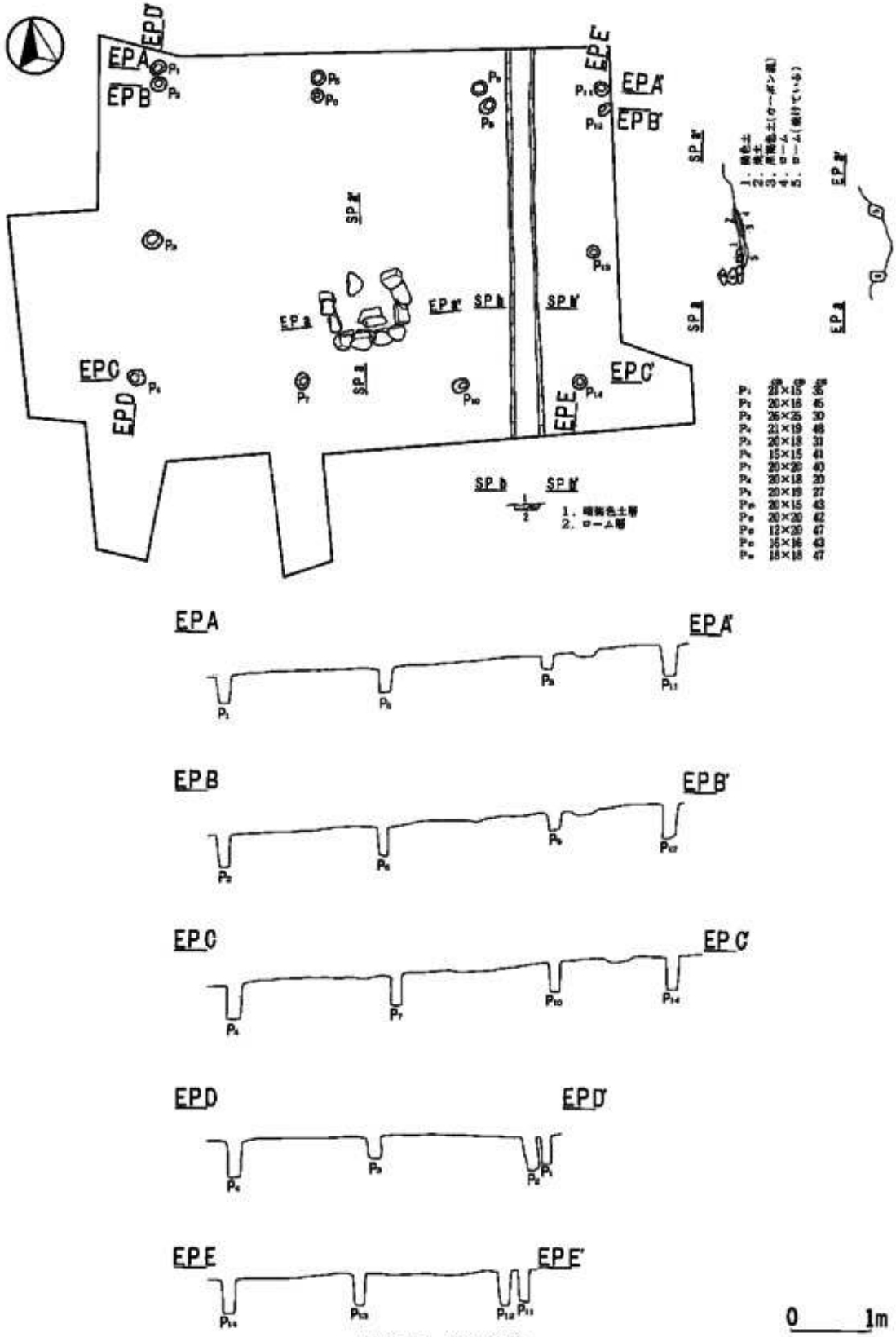
2．建物遺構

字神山210番地、本間一美氏所有地からの発見である。発見、調査の契機となったのは、平成2年秋、土地所有者が大根の収穫が終わり、大根貯蔵用の穴を畑に掘ったところ、あろうべきはずもない人頭大の川原石が数個、その穴の中から出てきたのである。そこで所有者は、これは何かおかしいということで「原口館を探る会」の会員に連絡があり、筆者にも連絡がもたらされた。同年11月、探る会々員とともに現地の発掘調査を実施したところ、カマドをもつ掘立柱の建物遺構が発見されたのである。

カマドの石は若干動かされていたものの、ほぼ100×90cmの範囲にコの字形に最大3段配しており、床面を掘り凹めて火床が設けられている。特に煙道のような煙出しの施設はない。焼土は最大でも10cm未満の厚さであり、かなりの年月を使用したとも見えない。カマドを中心に周辺を拡幅してみたところ、図のようにP_1～P_{14}までの柱穴とみられる小ピットが規則正しく発見されている。これらは直径20cm内外で、深さ40cmを越えるものが多く、割合しっかりしたものである。ピットの間隔は150～210cm位であり、ピット間の対応関係は明確になっている。南側に2ケ所、ピットの有無を確かめるためトレンチを設定してみたが、これら以外にピットは発見されていな


EP A
EP A'
SP A
SP A'
SP B
SP B'
EP B
EP B'
EP C
EP C'
31m
30m
29m
28m
0 1 2m
EP A 31.40m
EP B 30.60m
EP C 31.30m
SP A 30.80m
SP B 31.90m
0 1m

第20図　溝状遺構



第21図　建物遺構

い。北側は新旧のものが夫々対になっており、ある時点で建替えが行われたことを窺わせる。

これらの柱穴から想定される建物は、ほぼ東西3間、南北2間の掘立柱建物が考えられる。カマドは建物の中心よりもやや南側に寄った位置に設けられている。本遺構内から特に伴出遺物は発見されていない。ピット内から有柄の石鏃が1点あったが、本遺構とは無関係とみられる。なお、調査区内から直線状の浅い溝が1ケ所発見されているが、建物遺構よりは古いものと判断された。

さて、この建物遺構は縄文期のものではないし、これまでの調査例から考えて擦文期のものでもない。今のところ、こうしたカマドを備えるものは擦文期では調査例は見あたらないし、柱穴の間隔からして、尺貫法を意識していると推察されるからである。伴出遺物はないが、和人のものである可能性が高いと考えておきたい。

原口川の崖際に近いとは言え、現地は神山の台地上にあり、原口川との比高差も30m以上もあって居住空間としては不便な環境にあると言わざるを得ない。しかし、聴き取りで分かったことであるが、旧国道が供用される以前には、本遺構の直ぐ近くを原口から小砂子に至る道路が通じていたという。現在は造田によってその道路の位置さえ明らかにできないが、本遺構は旧道沿いか、その直ぐ近くにあった建物と見てよいであろう。旧道との関係から考えると、本遺構は少なくとも明治初期かそれ以前のものと推測されてくる。また、崖下は原口の集落であり、建物内にカマドを設けているところから、単なる野良仕事用の出作小屋とも思えず、一定の居住を目的とした施設と考えられてくる。

今の段階では本遺構の目的、時代性を決定する材料に欠くが、前述のように少なくとも明治初期以前としてきおきたい。ただ、聴き取りによれば、この近くにもまだ畑の中から川原石の出てくる場所があるといい、今少し周辺の調査を重ねて検討してみることにしたい。

Ⅵ. ま と め

以上見てきたように発掘調査によって海岸に沿って延長120ｍ余に及ぶ空堀、住居址様の遺構、縄文時代のＴピット、近世初期とみられる直線状の溝とピット群が発見された。遺物としては擦文期を主体に、縄文時代、中、近世期のものがあった。本遺跡は今後とも更に継続して調査を進め、遺跡の性格をより明確にし、将来的には保存・整備を図りたいと考えている。遺跡の主体となった空堀遺構とこれに伴なう遺物を中心にしながら現時点での成果、問題点、今後の課題等を記して若干のまとめとしておきたい。

１．空堀遺構について

調査開始前には志苔館の空堀をイメージしていたのであるが、調査の進展につれて、予想とはかけはなれたものであった。少なくとも大きく分けて新旧２時期の空堀が存在するのは確実である。

明らかになった以外にまだ延びていると別であるが、今、仮りに発見された空堀をその推定延長状況によって以下のよう分けてみたいと思う。古い時期のものを空堀１、調査区４～６を経て同８で空堀１と重複しているものを空堀２とする。これらの東側にあって、調査区１～３を経て同６で空堀２と繋がるものを空堀３としておく。空堀３は、その延長状況から空堀１・２と調査区４で重なりそうである。調査区６から９を経て12に至るものを空堀４としておきたい。更に空堀によって囲繞される部分をＡとし、同様に空堀２はＢ、空堀３はＣ、空堀４はＤと仮称する。

こうして空堀に囲繞された区域を一つの郭として見ると、当初、この地域に郭Ａが存在していた。これがある時点で廃絶されて、ある程度埋もれた段階で空堀２が掘られ、その排土で空堀１を埋め込み、郭Ｂが形成されたことが分かる。郭Ａから郭Ｂへは面積が若干増える程度であり、こうした狭い範囲にあえて新旧２時期の郭を構成する意味が何か解釈に困るが、この囲繞される先端部が前述した鱒淵の岬であり、おそらくこれを強く意識したものであろうか。

空堀２と３の関係においては、空堀３の方がやや小型の空堀であり、郭の面積を比べると郭Ｃは郭Ｂの約３分の１程度である。空堀３の形態から見て、少なくとも空堀１や空堀２より先行するものではないだろう。空堀３が単独で存在していたと考えると、単に半月状の形状を示すのみで、甚だ締りのないものとなってしまうのである。また、空堀１にあったような空堀２の掘り上げ土による埋め込みの様子は窺えない。土層図を検討しても判然とはしないが、郭Ｂと同時期か若干の時期差をもって郭Ｃが構築されたものであろう。両者を比較してみると空堀の埋没状況に大きな違いはなく、遺物の出土状況から見て、おそらく郭ＢとＣは同時期に使用され、同時に廃絶したものと考えられる。ただ、郭の面積と空堀の規模の違いが何に起因するのか分らないが、おそらく郭内の使用目的の相違によるものであろう。全面調査によって、郭内にどのような遺構

があるか、その結果を待って検討すべき課題である。

空堀２と空堀４との関係についても不明である。空堀の規模、形態についてもほとんど差は認められない。空堀４の形状を見ても分かるように、調査区10・11で大きく折れ曲がっている。果たしてこれが本来の形状か、調査区10・11で西側へ折れて二つの郭に分けられるものか、今後改めて調査を実施すべきと考える。空堀の埋没、遺物の出土状況は各調査区とも大差なく、空堀２・３と比較しても特別の差はない。したがって、空堀２と３との関係のように、同様に使用・廃絶の過程を経ているとみられる。

空堀と郭との関係について見たが、空堀に伴って土塁や柵列のようなもの、郭へ出入りする橋などの施設については今回の調査では何ら確かめていない。果たして河野常吉がかって見たように土塁があったものか、他の施設がどうであったか、今後の調査の課題としておきたい。

次に空堀遺構の帰属時期について考えてみることにしたい。先ず、火山灰との関係について述べる。本遺跡では肉眼で観察した限りでは２種類の火山灰が認められる。分析はしていないが、他遺跡の例から比較して黄白色の苫小牧火山灰と認められるものと、灰白色を呈する渡島大島（1741年）を起源とするものである。後者は空堀１以外の全ての調査区で観察され、空堀がほとんど埋もれた段階での降下である。したがって、同火山灰が降下した時点では空堀は完全に廃絶していたとすることができる。

苫小牧火山灰層との関係であるが、同火山灰は本遺跡の場合調査区１、トレンチＣ、同Ｆなど部分的に発見されているにすぎない。しかし、調査区１で見る限りでは、少なくとも空堀は同火山灰下年代よりは新しい。同火山灰層を切って空堀が構築されており、空堀内に同火山灰層が堆積している調査区は１ケ所も確認されていない。苫小牧火山灰の降下年代は未だ明確ではないが、少なくとも十和田ａ（おそらくＡＤ915年）よりは新しいと考えられているものであり、青森県内の発掘調査例では10世紀中葉ころの降灰と推定されているものである。したがって、火山灰との関係では苫小牧火山灰の降下年代よりは新しく、渡島大島火山灰降下時には既に廃絶していたと言える。

視点を変え、遺構と遺物との関係から見ていくことにしたい。遺構との関係では、空堀１が完全に埋め込まれた上部（つまり郭Ｂ）に擦文からアイヌ文化期に特徴的な錘石とみられる集石があった。しかも、この集石の周辺を精査したところ焼土（炉）があり、前述のような住居址様の遺構が発見されている。また、空堀１を埋め込んだ上からは、やや縦った擦文式土器が発見されている。このことから、住居址様の遺構は擦文時代の可能性が強いと考えておきたい。

空堀１については、調査区７から縄文式土器とともに擦文式土器片がいくつか出土している。刻文・沈線文を特徴とするような資料はないが、胎土、調整手法などから他の調査区のそれと違いは認められなかった。そうすると、空堀１は擦文期の所産と考えて大過あるまい。

更に遺物について言及するならば、確かにいくつかの調査区から陶磁器・古銭が出土している。陶磁器の出土層位はほぼ表土中に包含まれていたもので、空堀との積極的な関連性は窺えない。

古銭は火山灰層より下部から出土しているものの、堀底に近いレベルからではなく、空堀が廃絶してほぼ埋もれかけた段階の層位からの出土と観察されたのである。これに対し、空堀内出土の遺物で圧倒的なのが擦文式土器であった。出土点数は1,300点余に達し、全出土量の6割に近い数量であった。このほか若干の須恵器、鉄製品、スラグ、羽口なども出土している。これらは層位的にはほぼ万遍なく出土しており、堀底に貼り付いた状態で須恵器（調査区10）が発見された場合もあった。図化した擦文式土器のほとんどは空堀内からの出土であり、一括廃棄の様相を示している調査区（調査区8）すらあった。このように遺構、遺物の関係から見ていくと、空堀の構築時期は擦文時代の所産である可能性は極めて強いと言えるであろう。

北海道の場合、中世城館の調査例が僅少であり、この方面から本遺跡と比較検討するには材料不足の感は否めない。必ずしも従来発見されているパターンに拘束されることはないと思うが、穏内館や志苔館のように中世期の所産であれば、少なからず陶磁器その他の遺物が出土するものである。そういう意味においては3枚の古銭の出土だけでは、空堀が中世期のものである積極的な証拠とは断じ難い。また、消極的な証拠ではあるが、穏内館や志苔館と空堀や郭の面積を比較しても本遺跡の方がはるかに小規模であり、十二館の一つと考えるにはいささかの躊躇がある。ただ、古銭が出土しているという事実は、中世期に本遺跡が何らかの目的で使用されたことを示しているのであり、それがどういう形態・目的であったのか、延いては十二館の一つである原口館とどのような関わりをもっていたのか今後の課題としておきたい。

2．擦文式土器について

今回の調査では2,300点余の擦文式土器が出土しているが、出土量としてはそう大きな数ではない。松前町内では過去に静浦D遺跡や札前第1地点で好資料を得ているが、比較的調査例の少ない渡島半島南部の該期遺跡の例を加味しながら、本遺跡出土資料と若干の比較検討を試みることにする。前述のように本遺跡は将来再調査を考えているので、ここでは予察的な意味に留めておきたい。

器種には甕、浅鉢（杯）のほか手捏の小型のものがあり、個体数としては口縁部・底部施文手法などによって170個体以上の識別が可能である。施文の特色としては前述のように無文のもの（1類）、数本の沈線文を口縁部に巡らすもの（2類）、刺突文の加わるもの（3類）、更に刻線文によって文様帯を構成するもの（4類）がある。これらのうちでは2類が最も多く、次いで4類、1類である。札前第1地点ではおおよその出土個体数1370中、刻文、沈線文（鋸歯文）などで文様帯を構成するものは50数個体で、全個体に対する出現率は4％強であった。これに対し本遺跡では1類、2類の出現率が圧倒的に高いことは札前例とは変らないものの、3類、4類の出現率は10％位にはなりそうである。これは札前とは先ず大きな相違である。

次に文様帯の構成要素について比較してみる。静浦D遺跡では出土数が少なかったことによるかもしれないが、口縁部に刻文を巡らした浅鉢の破片が1点出土しているにすぎず、他は1類、

2類のもののみであった。札前では横走沈線文に刺突文や鋸歯状の沈線文によって口縁部文様帯が構成されている。やはり無文や横走沈線文のみを施すものが圧倒的に多いようである。以上のような特色を備えたものは、渡島半島南部のある時期の一つの特徴であると言えよう。

出土量は少ないが、森町御幸町遺跡の例では札前や青苗には見られない格子目文などによる文様帯を構成している。また、乙部町元和8遺跡の資料も幅の広い文様帯をもち、多条の横走沈線文と鋸歯文、刻文を特徴とし、やはり札前、青苗例と様相を異にしている。この違いは札前や青苗との時期の相違を示していると考えられる。

本遺跡のうち4類としたものは、札前例と同様に横走沈線文に刺突文や鋸歯状の沈線文によって文様帯を構成するものがやはり多い。しかし、少ないながらも綾杉文や貼付囲繞帯文を付すものがあり、文様帯の幅が胴上半部にまで及びそうな広いものが存在するのである。札前の例と本遺跡の場合では、以上のような相違にも気付くのである。

本遺跡で見られる綾杉文は横位のものであり、この種の施文手法は佐藤達夫氏の編年によれば（佐藤1972）Ⅲ6段階に出現し、崩れたものはⅣの段階にまで見られるようである。石附氏によれば、綾杉文はⅣ期には横走するものが主体になるという。（石附1984）一方、貼付囲繞帯文について石附氏は「馬蹄形の型押し文」はⅣ期において一般的となり、Ⅴ期にも確実に続いていくとしている。この種の文様について豊田氏はa～d類に分類している。（豊田1987）この分類にしたがうと本遺跡では鋸歯状の刻みの入るもの（C類）と馬蹄形文が施されるもの（d類）と2種認められる。同氏はc類→d類という形式学的変遷を考え、C類は石附編年のⅢ・Ⅳ～Ⅴ、菊池編年のC～D、d類は石附Ⅳ～Ⅵ、菊池D～Eに位置づけている。

以上のように横位の綾杉文、貼付囲繞帯文に着目して先学の編年に当ててみると、石附編年のⅤ段階にあたり相当し、静浦D、札前・青苗などはこれに後続するグループと見て大過あるまい。横位の綾杉文を施すものは渡島半島南部では厚沢部川河口遺跡表採資料中に類似するものを見ることができよう。（大沼1976）貼付囲繞帯文はほぼ全道的に分布し、中でも石狩低地帯から日高・内浦湾沿岸に集中するようである。このほか青森県内では陸奥湾沿岸地域に分布密度が濃いようであり、特に蓬田村大館、小館遺跡では本遺跡との関連性が窺えそうな好資料が出土している。

では、実年代としてどのような位置づけが可能となるであろうか。擦文文化の終末に関しては周知のとおり、ほぼ11世紀とする見解（佐藤1972）から室町へ近世初期と見るなど様々なものがある。最近では土師器との対応関係や釧路市材木町5遺跡第15号住居址出土の湖州鏡の年代観などから、12世紀後葉にあたりに求めるものが有力である。しかし、本州北部（特に青森県内）の奈良・平安～鎌倉期にかけての土器編年の進展につれ、三浦圭介氏は青森県内の擦文文化の終末はほぼ11世紀後葉期に収まり、北海道の擦文文化そのものも同じく終末を迎えたのではないかという見解を示している（三浦1991など）。現時点ではいずれが当を得ているか判断の材料を持ちあわせていないが、少なくとも渡島半島南部では、青森県で擦文式土器の使用が終った段階ではこれと歩調を合わせたとみるべきであろう。古館遺跡との関連性から、札前第1地点はほぼこれ

に近い年代が与えられるとして11世紀後葉に、本遺跡については10世紀後葉から11世紀代の年代が与えられるかもしれない。

3．古代高地性防禦集落

近年、青森県全域と岩手県北、秋田県北地方に分布する古代高地性防禦集落が注目されてきている。青森県内では三浦氏によれば、六ケ所村戸鎖館跡、岡鷹架沼竪穴遺跡、野辺地町明前遺跡、八戸市風張(1)遺跡、東北町内蛯沢蝦夷館、大鰐町古館遺跡、弘前市石川長者森遺跡、蓬田村大館遺跡、小館遺跡（三浦1992など）があり、このほか中里町中里城跡（佐藤1992）も該当しそうである。大鰐町砂沢平遺跡でも大規模な空堀、溝跡が発見されており、報告では中世城館との関連を考えているが平安時代の可能性の高いものである。秋田県では鹿角市の妻の神(1)遺跡、太田谷地館遺跡が知られている。岩手県内ではまだ報告例はないようであるが、盛岡市以北には存在しそうであるという。

こうしたものは三浦氏によれば２タイプに分けられるという。即ち、集落全体を保塞する堀や柵列をもち、米代川流域以北の津軽地方を中心として日本海側に多く分布する津軽型高地性防禦集落と、太平洋側に多く分布するもので、比高差50ｍほどの河川や湖沼に面した丘陵先端を孤状や楕円状に空堀で区画し、この区画内には数軒の竪穴を擁する構造である。これを上北型高地性防禦集落と称している（三浦1992）。このような特殊な形態を有する集落が分布するのは米代川流域から盛岡以北で、しかも年代的には10世紀中葉から11世紀末までに限定されるらしい。このあたりに、こうした集落遺跡の意味を解く重要な鍵がありそうである。

先ず、分布地域に注目しておこう。陸奥国側では律令体制下に組み込まれたいわゆる奥六郡（胆沢、江刺、和賀、稗貫、斯波、岩手）はほぼこの分布範囲から外れていることが分かる。また出羽国側でも同様に、平鹿、仙北、河辺郡などの地域には分布していないようである。つまり、早くから中央の勢力下に組み込まれた地域には、こうしたものが造られなかったのである。

今昔物語集巻第三十一に「陸奥国安倍頼時行胡国空返語第十一」という説話が見えている。説話の詳しい内容は省くが、陸奥の奥には「夷」というものがいて、これより更に海の北に幽に見渡される陸地（胡国）があるという。頼時は「夷」と通謀して反乱を起こそうとしている疑いをかけられたため、一族郎等50人ほどと共に一艘の船に乗って胡国へと旅立った。大きな川を遡ったところ、千騎ほどはあろうかと見える胡人が押し寄せてきたので恐しくなり、胡国はとても人の住める地ではないということで空しく帰ってきたという話である。ここに見える胡国とはおそらく北海道を指しており、頼時は前九年の役の一方の雄安倍頼良（頼時）のことである。前九年の役の端緒となったのが「夷」との通謀と中央政府に思われてしまったこと、何より興味深いのが頼時の勢力範囲より北に「夷」というものが住んでいたという記述である。古代においては蝦夷社会の政治的まとまりは村として把握され、事実上郡に相当する広がりがあったとしてもやはり村としかいわれなかった。奥六郡は俘囚の定住地で内国とは異なっているものの、俘囚は服属

した蝦夷であり、蝦夷そのものではない。だから奥六郡は郡であり、その北にあった蝦夷村とは区別されていたという。（大石直正1978）奇しくも蝦夷村として理解される地域と、高地性防禦集落の分布圏が一致し、蝦夷村の担い手によって造られたものと見ることができる。

前述のように、高地性防禦集落の年代はある部分では前九年、後三年の役とは重なりそうである。しかし、両役の舞台となった地域（秋田側では平鹿、仙北郡、岩手側では奥六郡）にはこうしたものが分布していない事実は、両役に直接関わりのある武力衝突の所産と見ることはできまい。高地性防禦集落の分布範囲からして義家軍あるいは頼良軍に対する蝦夷側の防禦のための施設とは考えにくいであろう。むしろ、蝦夷側の内的な問題の結果として、こうしたものが造られたと捕えるべきであろう。時代は異なるが、ここで想起されるのが弥生時代の環濠集落や高地性集落である。農業生産が増大するにつれ、集落間の矛盾が高まり、それが延いては集落間の紛争に発展して行った事実である。こうした現象が10世紀中葉～11世紀代の蝦夷村にも起ったと考えられまいか。

寡分にして知らないが、三浦氏は10世紀後葉から11世紀にかけて岩木川水系の中、下流域の広大な平野部に遺跡が進出していくこと、農耕技術に牛馬が採用された可能性が高いこと、米代川流域から岩木山麓にかけて鉄の大規模な生産が行なわれていた事実を指摘している。（三浦1992）こうした事実は農業生産の増大と表裏の関係を物語るものであり、これが却って集落間の緊張関係を生み出したのではあるまいか。その結果として、高地性防禦集落がこれらの地域に造られたと解釈してみたいのである。これらの地域も平泉藤原政権から鎌倉政権の力が及び政治的、社会的な安定を見るに至った段階では最早こうしたものは不必要となったと理解されよう。

4．保塞集落について

東北地方北部の情勢を見ながら高地性防禦集落との関わりを考えてみたが、本遺跡のような場合はどのような解釈を加えると良いであろうか。津軽・下北型高地性防禦集落にあてはまるか否かは別にして、類似するものが渡島半島南部にはまだありそうである。例えばチャシとして紹介されているが、上の国町の「ワシリチャシ跡」がある。（藤田1981）『北海道のチャシ』では丘先式と分類されており、日本海に面した海岸段丘上に構築されているものである。直状の１条の空堀があり、背面には険しい山が迫っている。空堀の一部試掘調査をしているが、その中から若干の擦文式土器が出土しており、擦文期の可能性の高いものである。また、まだ試掘調査の段階であるが、乙部町小茂内遺跡は注目される遺跡である。近々、本格的調査が実施予定のようであるが、小茂内川の川口、日本海に面した丘陵上に第１周溝、第２周溝と仮称した２つの溝（確認面での幅が130～160cm、深さ80～90cm）が発見されている。第１周溝は15ｍ×20ｍ程度の楕円形に巡るとみられ、第２周溝は40ｍ×25ｍの範囲に馬蹄形に巡るらしい。試掘調査では縄文式土器のほか、やはり若干の擦文式土器が発見されているという。また、正式の報告（本文編）はないが、奥尻島青苗遺跡の山本台地投棄溝がある。調査にあたった佐藤忠雄氏によれば「明らかに人工的

なもので幅２ｍ、深さ0.5ｍ、長さ４ｍは続いていた」という。このほか、森町尾白内貝塚でも擦文期の空堀の一部が発見されているという。小面積の調査のため全容は分からないが、確認面での幅約3.6ｍ、地表からの深さ2.8ｍに達し、本遺跡の空堀に匹適するものであるという。(1993年報告予定）なお、伴出土器は先に調査された御幸町（藤田1985）遺跡に類似するもので、本遺跡より先行するタイプと思われる。このようにして見てくると、本遺跡のようなものは決して特異な例ではなく、まだ幾つか類例がありそうであり、ある時期を象徴とする遺構となる可能性をもっている。調査が進展するにつれ、あるいは全道的な広がりをも示すかもしれないのである。

従来、外見上の空堀の存在によって「チャシ」として報告されているものの中に、こうしたものが含まれていないか再検討の余地があろう。もし、こうしたものが明らかに擦文期の所産であると判明した時には、最早それは「チャシ」の名称を冠すべきではないことは自明の理であろう。「チャシ」はあくまでもアイヌ文化期の所産であって、外見上の形態が例え似ていたとしても、擦文時代のそれとは厳密に区別されるべきと考えるからである。本遺跡の場合のような全容を明らかにしないまま「チャシ」に対する適当な名称を冠するのは不適正であろうが、空堀があって内部に住居址とみられる遺跡が存在することから、とりあえず「保塞集落」と仮称しておこう。

擦文期にあって何故このような保塞集落が生み出されてきたのか、擦文文化（社会）そのものに関わる重要な問題であるが故に、早々に結論は導き出し得ない。本州北部の高地性防禦集落が農耕との関わりで発生したとみられることは前述のとおりであるが、渡島半島南部の場合には果たしてそれが当てはまるのであろうか。一般に、擦文社会は農耕は副次的なものであり、主たる経済基盤は漁撈・狩猟・採集であったとする見解が有力である。しかし、擦文期の遺跡を調査してフローティーションを実施してもみると、必ずと言ってよいほど炭化した栽培植物種子が発見されている。また、花粉分析によってもこれを裏付ける結果が出ている。炭化米の発見はあるが水田耕作を示す証拠はまだ得ておらず、おそらく畑作主体の農耕と考えられるものの、その比重はかなり高いようであり、農業が副次的なものとする見解で北海道を画一的に理解してよいのか疑問の残るところである。とは言え、現状では擦文社会が集落間の緊張関係を生み出し得るだけの農耕社会であったのか、まだ具体的な成果は出てこない。

ここで気にかかってくるのが保塞集落の立地である。調査例が少ないことによるのかもしれないが、農耕に適した内陸部ではなく、いずれも見晴しのよい海岸段丘上に立地している事実である。本遺跡や「ワシリチャシ跡」の場合では、河川漁撈の重要性が感じられる環境でもない。農耕に比重が置かれていて、土地をめぐる争いを起こしそうな環境にも見えないのである。むしろ意識するとするならば、海上交通上の見張り場的な要素が考えられはしないであろうか。想起しなければならないのが擦文社会と東北地方北部との密接な交換関係である。五所川原窯址群の供給先の一つが北海道であり、鉄器も前述した産地からと考えてほぼ誤りはあるまい。おそらく、コメも津軽地方からもたらされたものであろう。これに対し、擦文社会から本州に運ばれたものが「重袤」（皮衣）や「鷹」であったかもしれない。

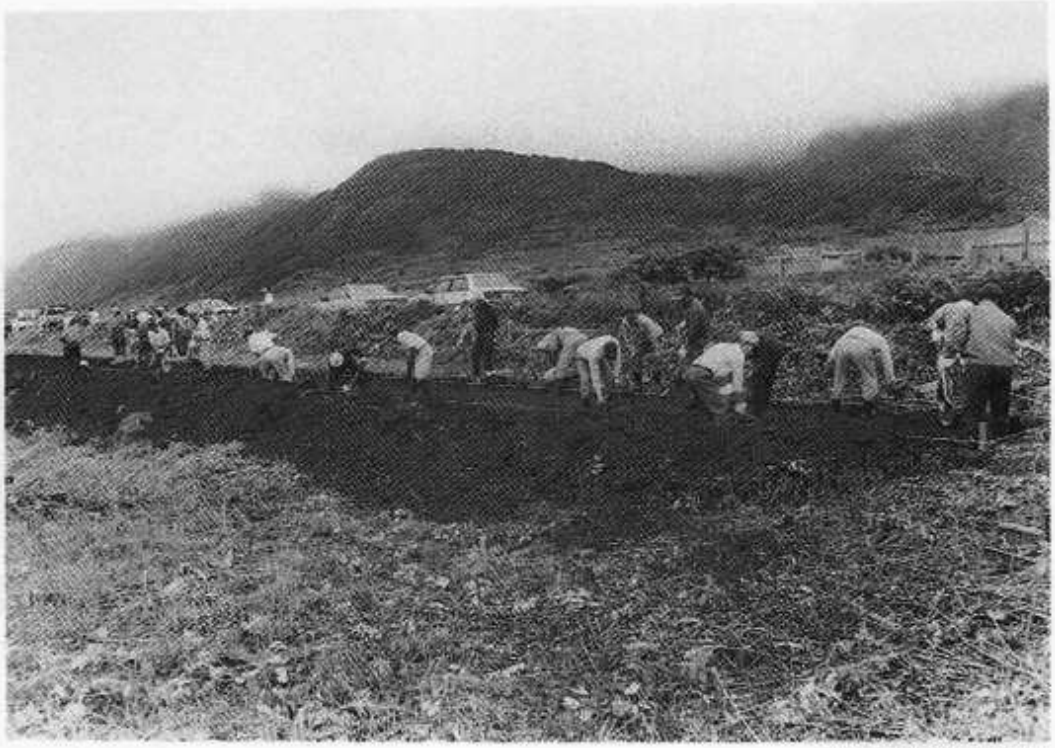
交換関係の中で、とりわけ重要であったのは鉄器とみられる。擦文社会では石器は既に過去のものとなり、日常生活の中での鉄器の占める地位は前時代とは比べるべくもなく高かった。今のところ、擦文期の遺跡では鉄の加工の痕跡は見い出せても、鉄そのものを生産した証拠は発見されていない。擦文社会の本州社会に対する鉄を通じての依存度は飛躍的に高まったと考えるべきであろう。それ故鉄器の流通ルートを押さえることは、擦文社会の中で死命を制するほどの重要な意味をもってくるのではあるまいか。藤本強氏によれば、アイヌの社会では交易品などを主体にして貧富の差やある程度の階層分化さえも認められるが、擦文文化の社会にあってはこれをほとんど認めることはできないという。しかし、地理的に供給地に近い渡島半島南部の擦文社会にあっては、貧富の差やある程度の階層分化という現象が、むしろ他地域に先がけて生じた可能性が高いのではあるまいか。そうした社会発展の帰結の一つとして、保塞集落のようなものが生み出されたと考えておきたいのである。

以上、本遺跡の全容も確認しないうち保塞集落について、擦文社会の側から一つの見通しを考えてみた。果たしてこれが渡島半島南部にのみ言い得ることなのかどうか、更なる事例を待ちたいものである。また、こうしたものが道南十二館とどう関わってくるのか、アイヌ期のチャシと何か関連性があるのかどうか興味深いものがあり、今後の課題としておきたい。本文では十分に触れなかったが、縄文時代の遺構、遺物に加え、近世期の溝状の遺構と遺物、時期も性格もよく分からないが住居とみられる遺構の存在など、僅かな面積の調査ではあったが様々な成果が得られたのである。一方、我々が目的とした原口館は一体どこにあるのだろうか、という疑問はますます深まるばかりである。

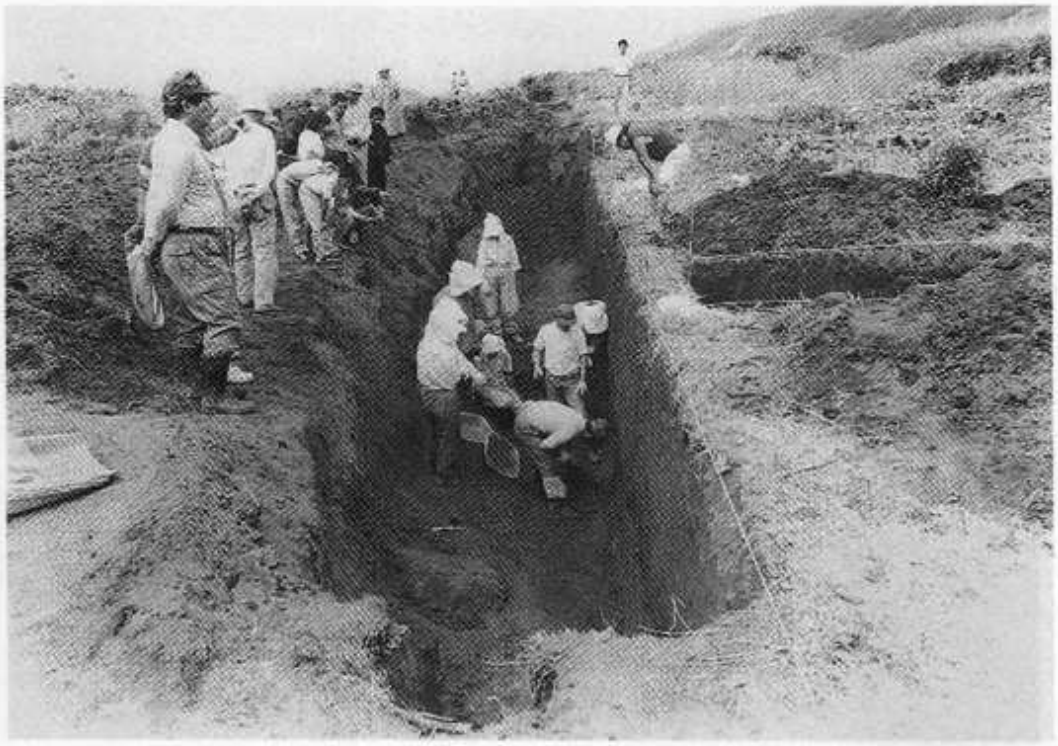
何の変哲もない、渡島半島の一漁村集落が原口であり、住んでいる人も極く普通の人々である。人々の、原口館を探したい、そんな熱い想いが大きな成果をもたらしたのである。一地方の教育委員会で文化財を担当する者として、地域の人々に支えられ、後押しされながら今後も歩んで行きたいものである。

本調査を進めるにあたり、実に多くの人々にご指導、ご援助を賜った。今後ともご高配をお願いして結びとしたい。

図版 1



平成２年度調査状況



同、空堀調査状況

図版 2

平成４年度調査開始前の状況

調査状況

図版 3

調査区 1

調査区 2

図版4

調査区4、5

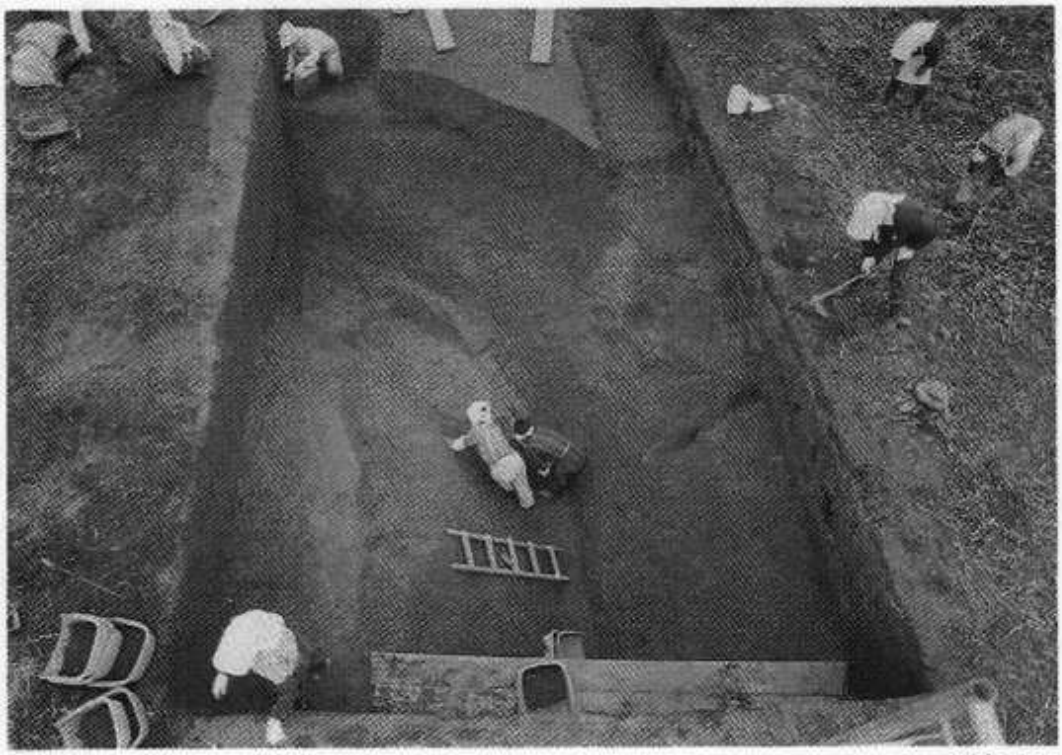
調査区6

図版 5

調査区７

調査区８

図版 6



調査区10

調査区12

図版 7

住居址様遺構

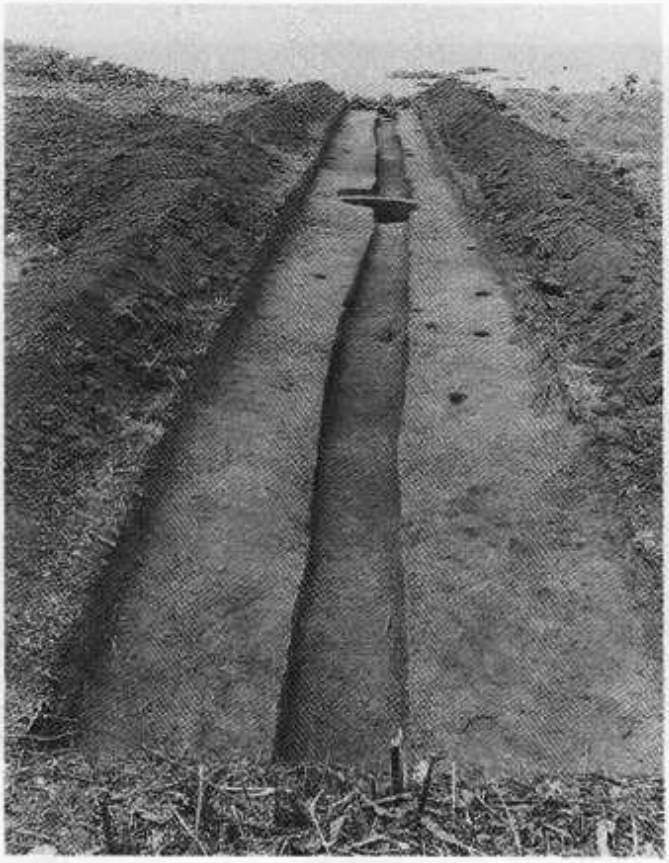
同、集石発見状況

図版 8

擦文式土器出土状況

Tピット

図版 9



溝状遺構

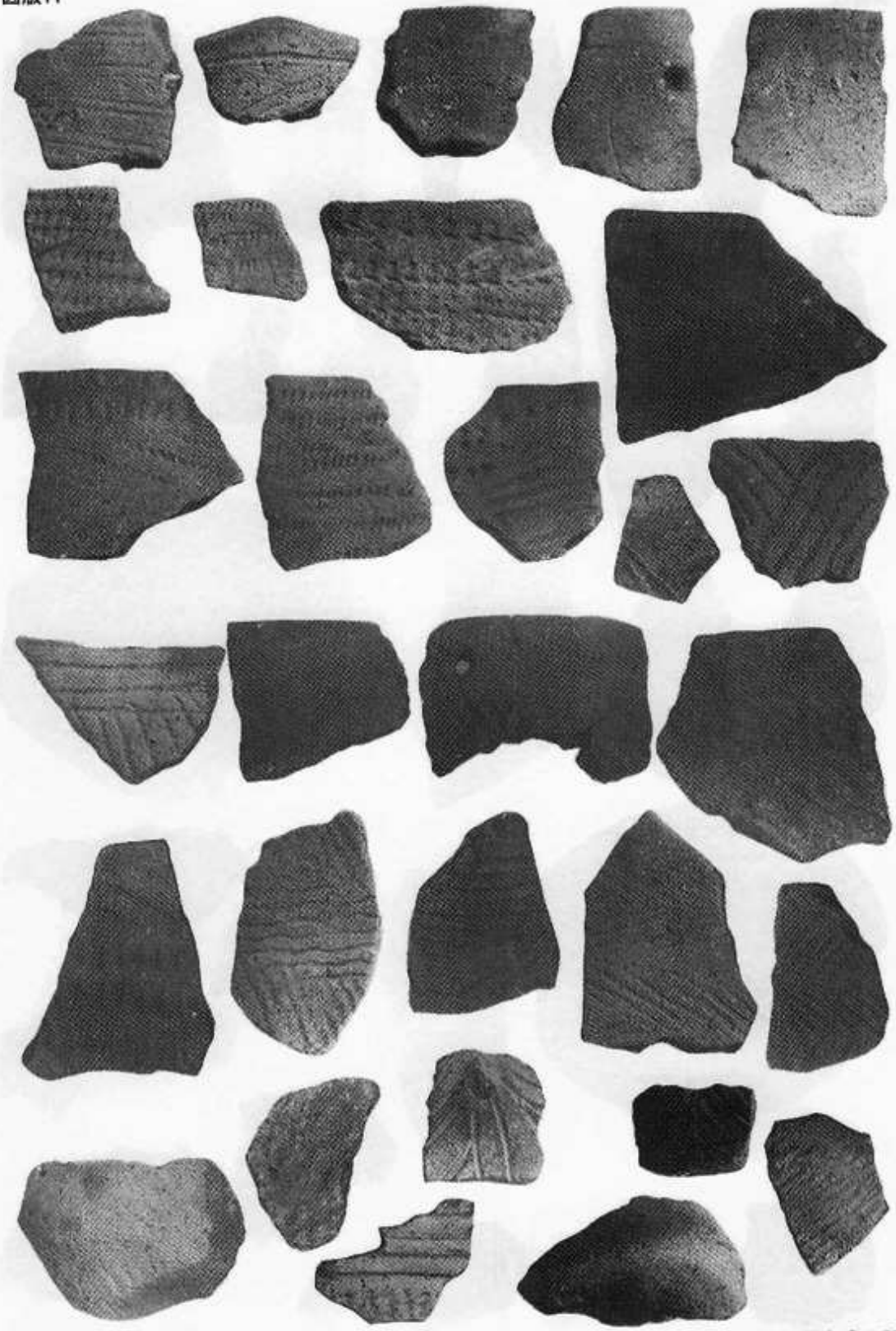
調査終了全景（北から）

図版10

建物遺構

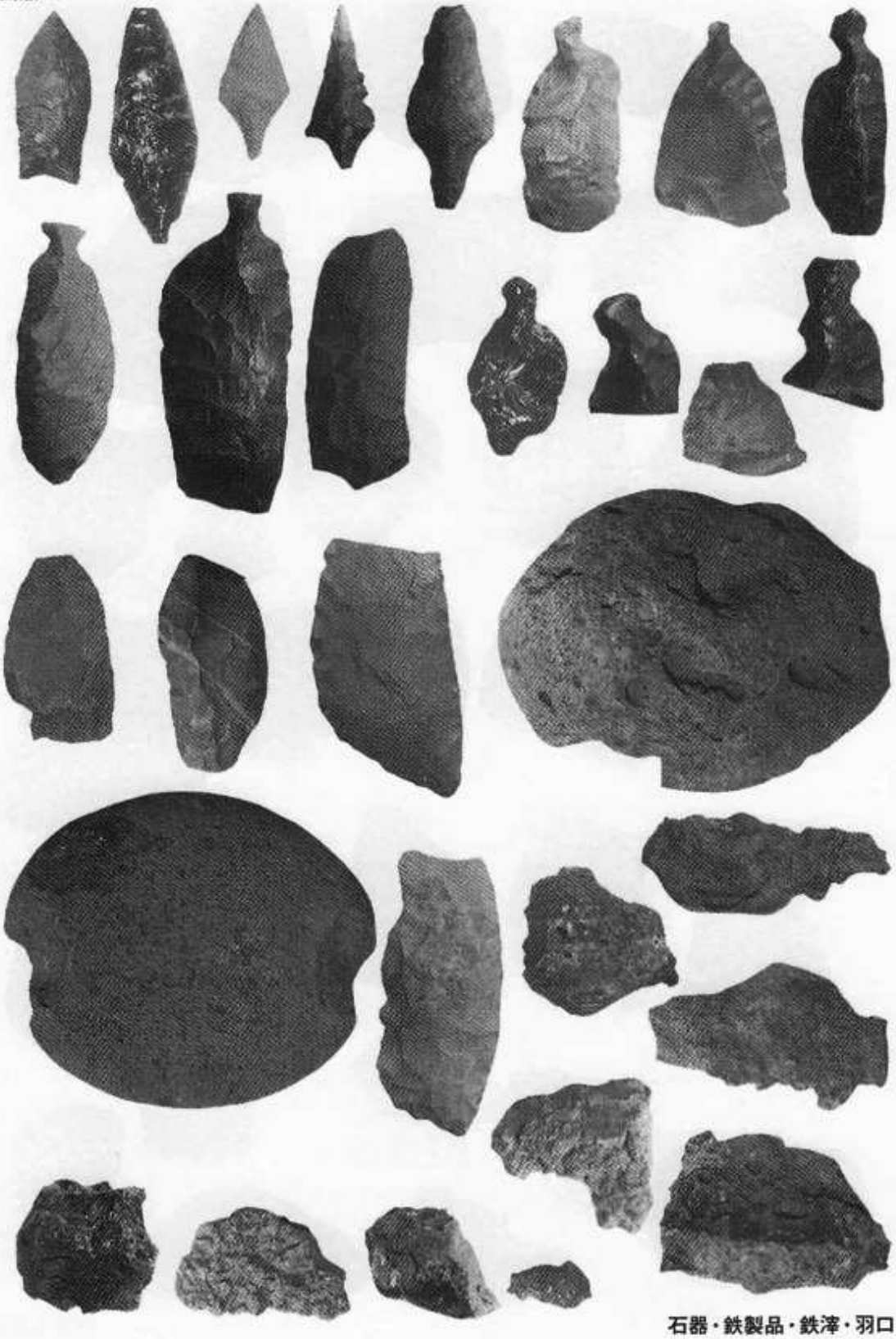
同、カマド

図版11



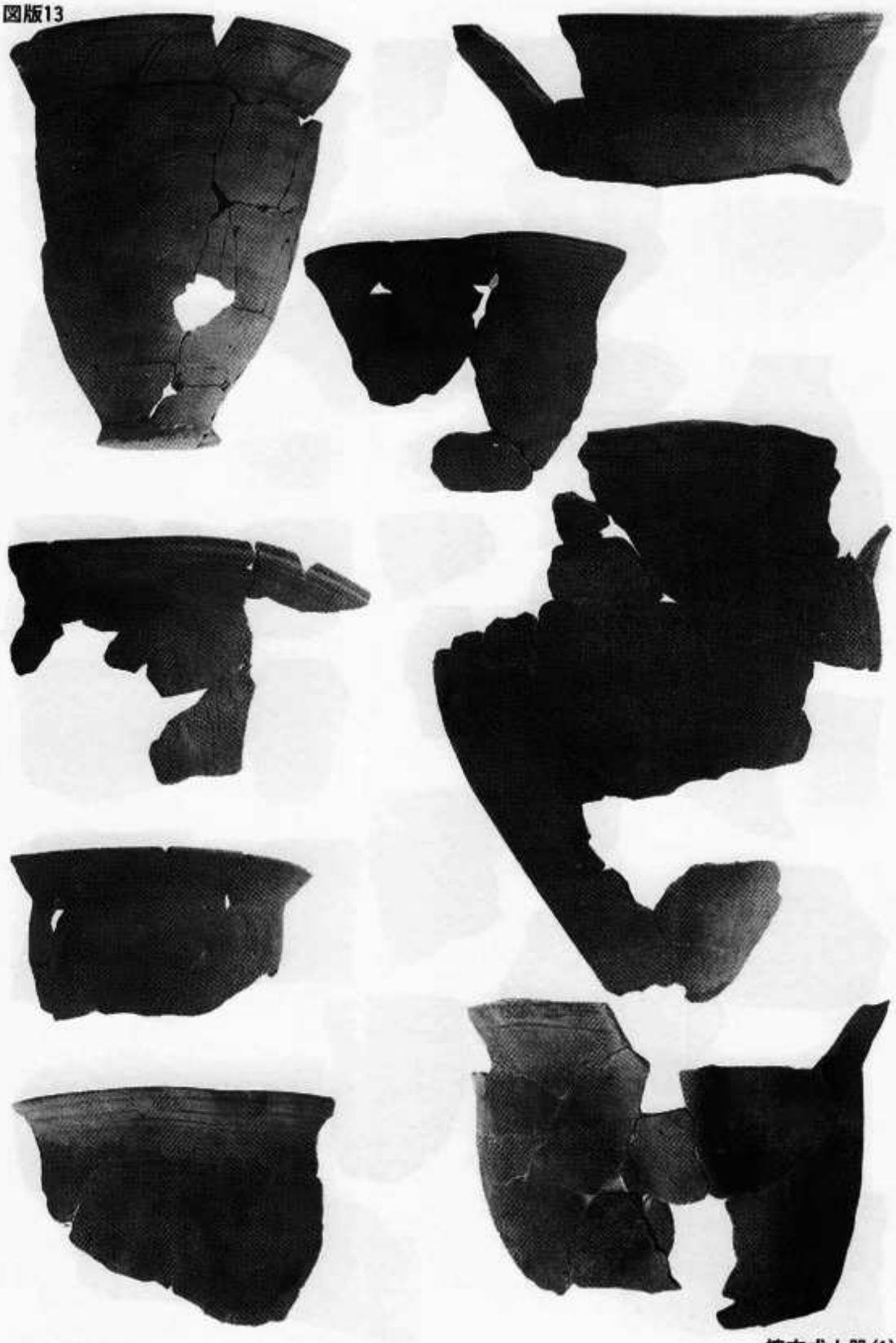
縄文式土器

図版12



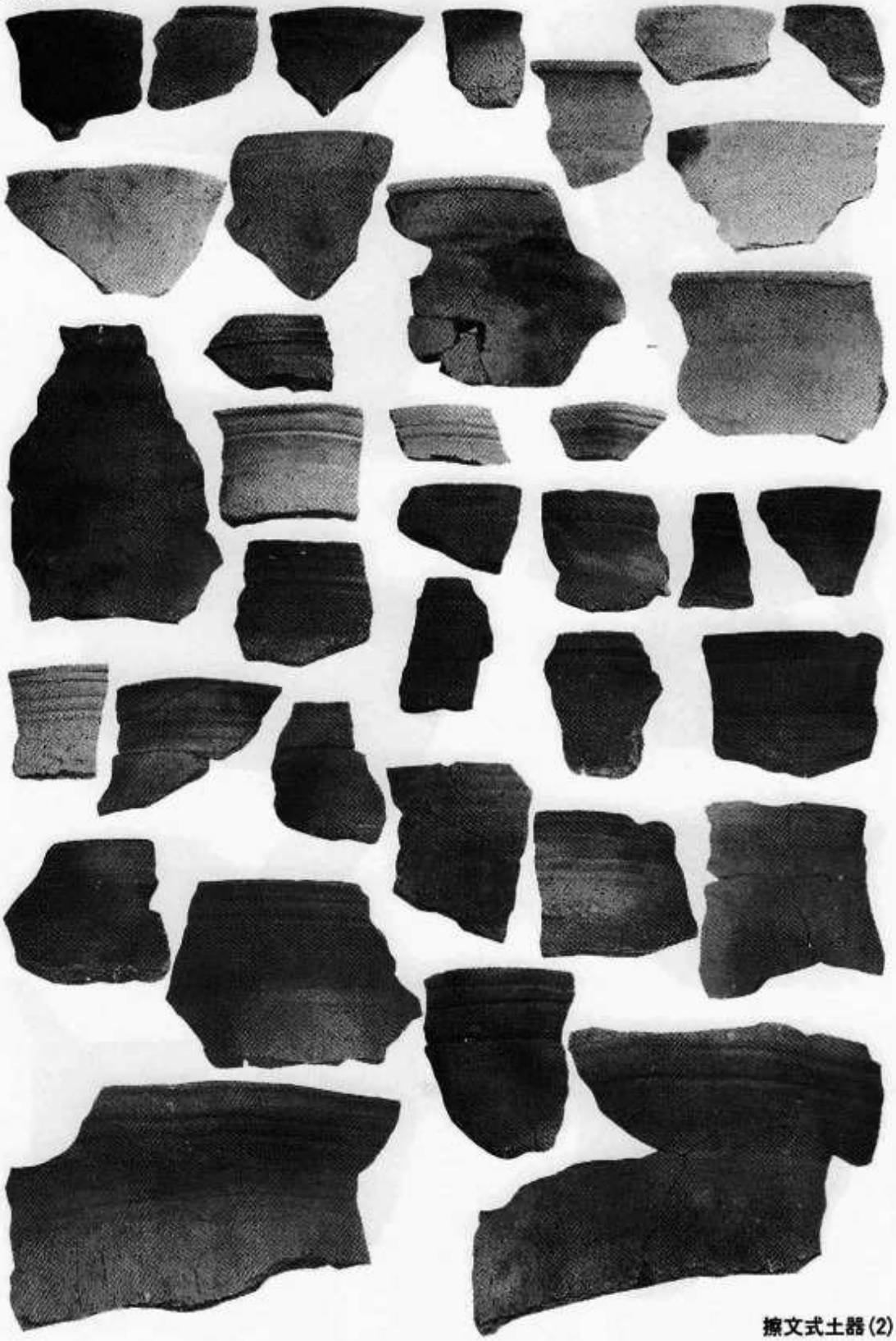
石器・鉄製品・鉄滓・羽口

図版13



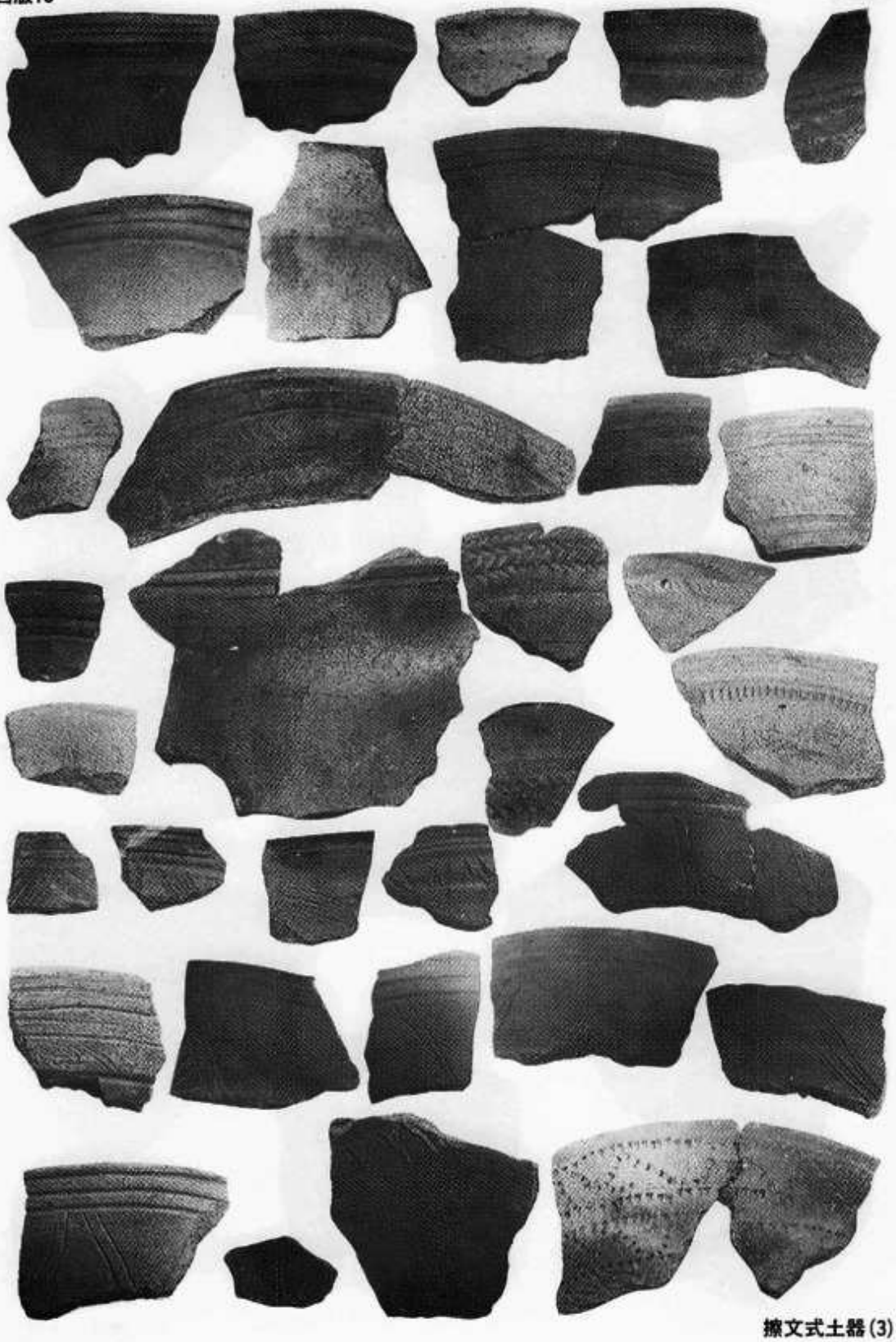
擦文式土器(1)

図版14



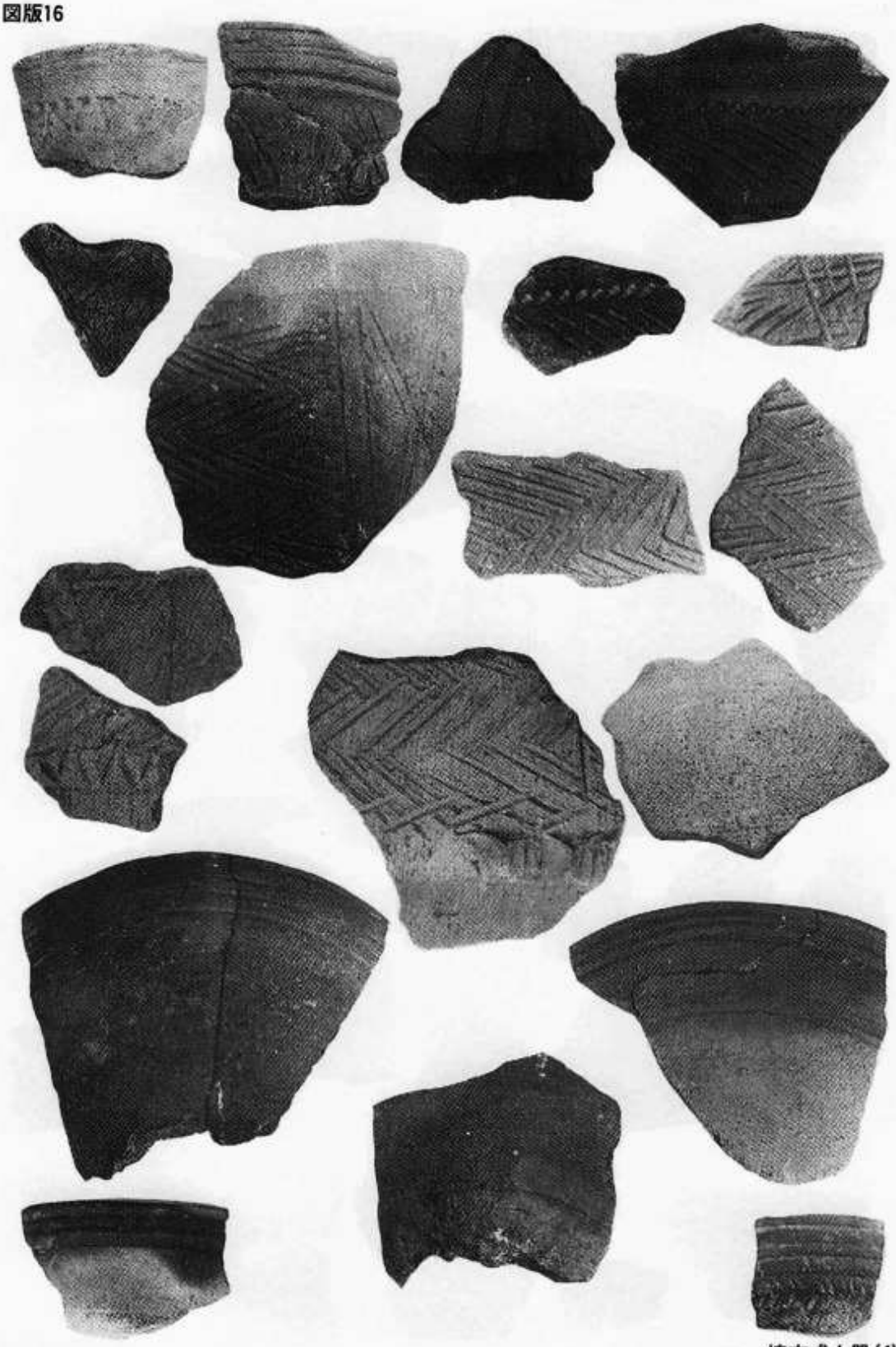
撚文式土器(2)

図版15



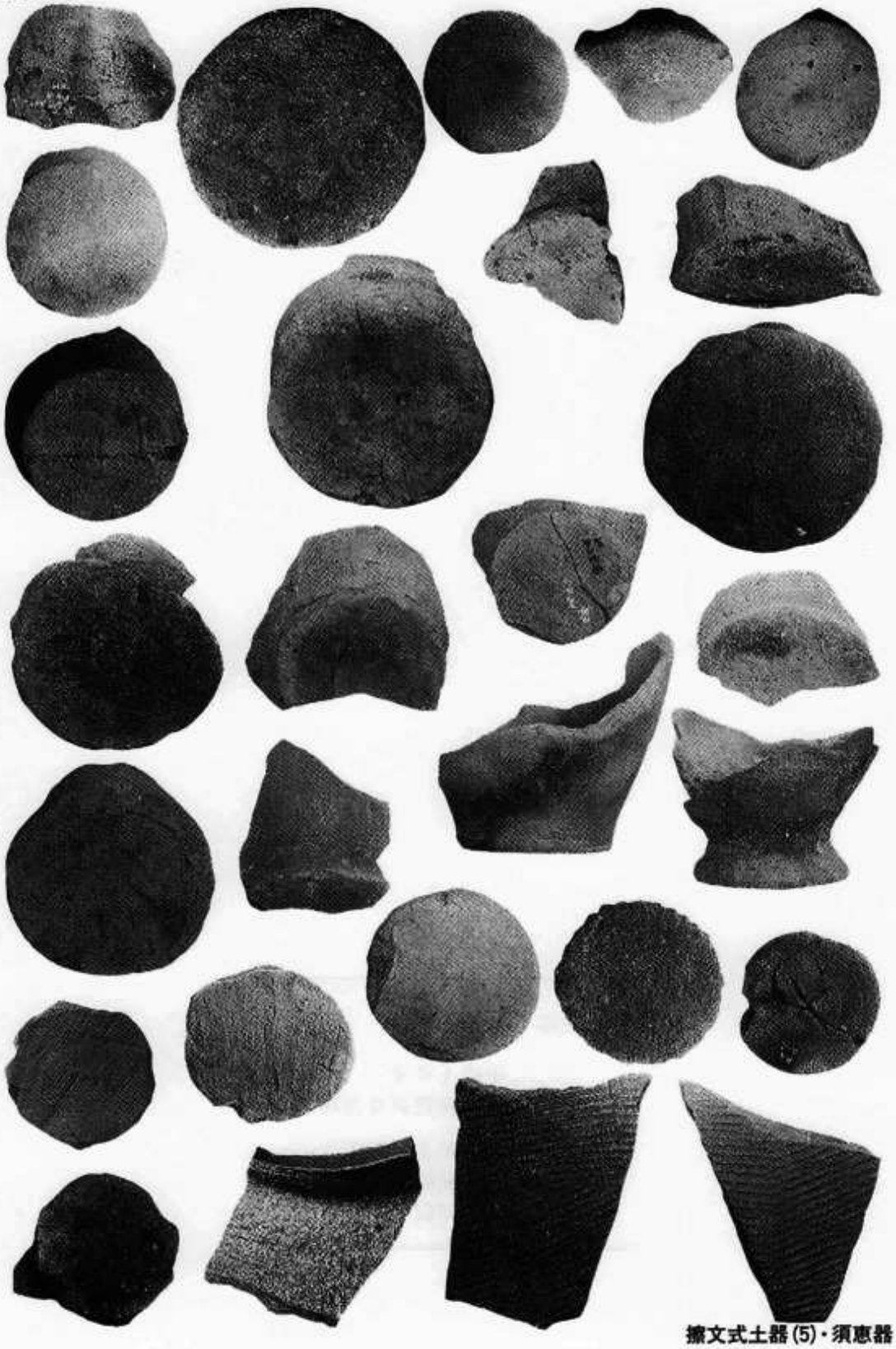
撚文式土器(3)

図版16



撚文式土器(4)

図版17



擦文式土器(5)・須恵器

史跡 原　口　館

平成４年度
原口館擬定地発掘調査報告

発　行　平成５年３月25日
発行者　北海道松前町教育委員会
印　刷　カジヤ印刷

原口館

原口館跡擬定地発掘調査報告書

電子版

2025 年 2 月 20 日　第 1 刷

発行者　北海道松前町教育委員会
〒049-1594 北海道松前郡松前町字神明 30
TEL:0139-42-3060／FAX:0139-42-2211
WEB:https://www.town.matsumae.hokkaido.jp/bunkazai/
MAIL:bunkazai@town.matsumae.hokkaido.jp

底本：原口館 原口館跡擬定地発掘調査報告書
（1993 年 北海道松前町教育委員会発行）

この電子書籍は閲覧を目的としているため、不鮮明な図版や誤字が含まれる場合があります。必要に応じて、お近くの図書館等で底本をご利用ください。